

# アラブ伝統文法クーファ学派における師資相承 — 9世紀の学派間論争と文法家サアラブ

岡 崎 英 樹

## 1. はじめに

「バスラ学派」と「クーファ学派」の二つの文法学派間に生じた見解の相違や、文法家間で行われた議論や論争は、文法書や文法家列伝の中で大きく扱われ、8世紀から10世紀に至るアラブ伝統文法の発展過程において、大きな役割を果たしたと考えられてきた。このような従来からの文法史観に対しては、ヴァイル (G. Weil) や、それに同調する立場から批判的に検討がなされ、文法学派の実在性そのものを疑う立場も現れた。

本稿では、現存する数少ないクーファ側の資料の一つである、サアラブの *Mağālis* を手がかりとして、彼をとりまく人間関係からみた9世紀の文法家と文法学をめぐる状況を考察する。さらに、サアラブがアル・ファッラーから受け継いだ文法用語や個別の文法問題に対する見解を整理し、12世紀のイブン・アル・アンバーリーの *'Inṣāf* の記述と対比させることにより、サアラブの時代の「学派間論争」の実態を検証する。

## 2. アラブ伝統文法における「学派」

アラブ伝統文法が本格的な形になって表れるのは、イスラームが興ってからおよそ150年後の8世紀のことである。初のアラビア語辞書『アインの書 *Kitāb al-'Ayn*』の著者、アル・ハリール・イブン・アフマド (al-Ḥalīl ibn 'Aḥmad [d. ca. 786]) の弟子で、バスラの文法家スィーバワイヒ (Sibawayhi [d. ca. 796]) による初の包括的文法書は、『書物 *al-Kitāb*』と呼ばれ、後の文法家たちは、屈指の文法書として継承し続けた。バスラの文法学の伝統は、アル・アフファシュ・アル・アウサト (al-'Aḥfaṣ al-'Awsaṭ [d. 830 or 835])、アル・ジャルミー (al-Ġarmī [d. 839])、アル・マーズィニー (al-Māzinī [d. 862]) らによって継承、発展したと伝えられる。アル・マーズィニーの弟子、アル・ムバッラド (al-Mubarrad [d. 898]) は、バスラの生まれであるが、カリフ、アル・ムタワッキルの治世の860年にサーマッラーに赴任し、カリフの死後はバグダードに移り住んで、アル・マンスール・モスク (Ġami' al-Manṣūr) で教鞭をとった。主な著作には、詩の分野で高い評価を得た *al-Kāmil* や、文法的見解を取りまとめた *al-Muqtaḍab* などがある。これらの著作には、文法用語の使い方などに、スィーバワイヒとは異なる点も多く観察されるものの、根本的な部分では、スィーバワイヒの方法論に依存していたと言える。

以上のような、アラブ伝統文法の正統派とみなされる「バスラ学派」と並び称せられるのが

「クーファ学派」である。クーファ学派に属する主な文法家<sup>1)</sup>には、アッ・ルアースィー(ar-Ru'āsī [d. 803])、アル・ムファッダール・アッ・ダッビー(al-Mufaḍḍal ad-Ḍabbī [d. 786])、アル・キサーイー(al-Kisā'ī [d. 799])、アル・ファッラー(al-Farrā' [d. 822])、イブン・アル・アアラービー(Ibn al-'A'rābī [d. 845])、イブン・アッ・スィッキート(Ibn as-Sikkīt [d. 858])、サアラブ(Ta'lab [d. 904])、アル・ムファッダール・イブン・サラマ(al-Mufaḍḍal ibn Salama [d. ca. 903])らがおり、文献が現存する純粋なクーファ学派の最後の文法家は、イブン・ファーリス(Ibn Fāris [d. 1005])である<sup>2)</sup>。

バスラとクーファは、様々な点で対比されるライバル関係にある都市であり、住民の気質や習慣を比較した書物も数多く残された<sup>3)</sup>。また、文法説明のための例文に二つの町を用いることも多い。たとえば、イブン・アッ・スィッキートの 'Alfāz には、場所を表す名詞から作られた動詞の意味の解説に、次のような例が挙げられている。「アル・キサーイーによると、このような例があるという。baṣṣar-a al-qawm-uの意味は、“人々はバスラに來た”である。kawwaf-ūの意味は、“彼らはクーファに來た”である<sup>4)</sup>。」このほか、文法家列伝などにおいては、地理的な観点から文法家が分類されたり、文法家たちによる座談会(maḡālis)についての記録がなされており、両都市の学者間の活発な議論や論争が、逸話や奇談を交えて伝えられている。

9世紀の終わりまでには、バスラやクーファの文法家のほとんどは、新しい首都バグダードへと活動の拠点を移していった。その過程の中で「二つの学派の融合」の結果として生まれた、折衷派としての「バグダード学派」が形成され、バスラとクーファそれぞれの方法論が収斂していったとの見方もある<sup>5)</sup>。アブー・アッ・タイイブ・アッ・ルガウイー('Abū aṭ-Ṭayyib al-Luḡawī [d. 961])は、9世紀の文法学をとりまく状況を次のように描写している。「学問の中心がバグダードに移ってからは、二つの軍営都市の文法家を取り巻く状況は一変した。バグダードでは、クーファの文法家が優位に立ち、指導者たちに重用されるようになった。人々は奇談を求めたため、学者たちは珍聞を自慢げに語り合い、学問的権威を得るため競い合うようになった。彼らは、枝葉末節に拘泥し、文法の原理原則を捨て去ってしまったため、混沌とした学問の状況を生み出すことになった<sup>6)</sup>。」

当時のバグダードで活躍した文法家たちは、カリフや総督のナディーム<sup>7)</sup>として、また、

1) 本稿で用いる「文法家」は、アラビア語の nahwiyy-ūna (文法全般、特に統語論に相当する分野を扱う学者) と luḡawiy-ūna (主に語彙論を扱ったり、辞書編纂に携わる学者) の両方を含む。cf. Versteegh 1989, 291-2.

2) Flügel 1862, 117-80; Fleisch 1961, 48-9.

3) Goldziher 1877 (1994), 32 ff.

4) 'Alfāz, 353.

5) 「二つの学派の融合」については、イブン・アン・ナディーム(Ibn an-Nadīm [d. 988 or 995])が987年頃に書いた著書で言及している。Fihrist 121. なお、アッ・ズバイディー(az-Zubaydī [d. 988])の *Tabaqat* には「バグダード学派」という範疇からの記述はみられない。

6) *Marātib*, 144.

7) 原義は“酒飲み友達”であるが、カリフと同席して種々の文化行事に参加したり、詩・文学・作法をはじめ諸学を講義して報酬を得た。

カリフの子供たちの教育を担う家庭教師として宮廷で働く者も多く、中でも、クーファ出身の文法家がバスラ出身者に比して大きな存在感を持っていた。その理由の一つに、クーファ出身の学者が『クルアーン』やジャーヒリーヤ詩の読誦に重きを置いていたことがあげられる。宮廷での文法家たちは、詩を朗唱し、イスラーム以前の古詩にまつわる知的会話を交わすなどして、アディーブの理想像を体現していた<sup>8)</sup>。クーファ学派を代表するアル・ファッラーも、バグダード総督アブドゥッラー・イブン・ターヒルのために、*Kitāb al-Bahī* や *Kitāb al-Muḍakkara wa al-Mu'annaḩ* などの著作を書いた<sup>9)</sup>。

ところが、このような状況もアル・ムバッラドの登場で変わってゆく。それまであまり知られていなかったスィーバワイヒの *al-Kitāb* の流れをくむ文法学こそが正統派であるという趨勢を作り出したのは彼の功績であったと言える。このようにして、7世紀のアブー・アル・アスワド・アッ・ドゥアリー（ʿAbū al-ʿAswad ad-Duʿalī [d. ca. 688]）に遡るとされるバスラ学派の文法学が優勢となった結果、クーファ学派は周辺に追いやられるようになり、後の文法家や評釈者がクーファ学派を批判の対象とするという伝統も生まれた。主流派にはなりえなかったクーファ学派の文法に対する姿勢については、誇張やステレオタイプを伴いつつ、様々な文献に触れられるようになってゆく。アッ・スユーティ（as-Suyūṭī [d. 1505]）は、アル・アンダルススィー<sup>10)</sup>の *Šarḩ al-Mufaṣṣal* からの言葉を引用し、「原則から外れるのを正当化するような事象を詩の一節で見聞きしたなら、クーファ学派はそれを一般的な原則とし、それに基づき文法体系を構築する<sup>11)</sup>。」とか、「クーファ学派は、詩の中に珍しい単語や言い回しを見つけると、決まって、文法書にそのための章や節を新たに設ける<sup>12)</sup>。」などと述べている。

また、クーファ学派に対するバスラ学派の優位性を示す逸話が様々な形で伝えられ、時に文法家個人への誹謗にもつながることもあった。たとえば、「アル・キサーイーから50ディーンを受け取ったアル・アフファシュは、密かにスィーバワイヒの *al-Kitāb* の手ほどきをした<sup>13)</sup>。」とか、「アル・ファッラーが死んだとき、枕元に *al-Kitāb* が置いてあった<sup>14)</sup>。」などといった類のものである。アル・ジャーヒズ（al-Ġaḩīz [d. 869]）は、「クーファ学派のアル・キサーイーが、スィーバワイヒの *al-Kitāb* を教えたり、子供たちを指導する際に、バスラ学派のアル・アフファシュに頼るとは、なんとばつの悪い事よ<sup>15)</sup>。」と述べたと伝えられている。このような、8世紀における両学派間の対立を象徴的に描いているのが、「スズメバチ論争」<sup>16)</sup>である。そして、9世紀の対立について、後世の学者が頻繁に記述している主人公は、アル・ムバッラドと

8) Versteegh 1993, 194.

9) *Fihrist*, 100; *ʿIršād* II, 137; VI, 111; VII, 278; Bosworth 1969, 59.

10) ʿIlm ad-Dīn Qāsim ibn ʿAḩmad al-Lawraqī al-ʿAndalusī [d. 1263].

11) *ʿIqtirāḩ*, 114.

12) *Hamʿ* I, 45.

13) *Marātib*, 120.

14) *Marātib*, 139.

15) *ʿInbāḩ* II, 350.

16) 詳細については、Blau 1963; 池田1970, 129-31; Talmon 1986を参照。

サアラブとなった。パトロンがアル・ムバッラドに、クーファ学派の文法家との関係を尋ねたところ、彼は「ムアーウィヤとアリーのごとし」と返答したとアッ・ザッジャージーは伝えている<sup>17)</sup>。

舞台がバスラやクーファからバグダードに移ってからは、カーター (M. G. Carter) の言葉を借りれば、「スィーバワイヒとアル・ファッラーが対決する、ある種のシャドー・ボクシング」<sup>18)</sup> が始まった。その流れの中で、10世紀のバグダードの文法家も、「クーファ学派」か「バスラ学派」のどちらかに色分けされるようになっていった。例えば、イブン・アッ・サッラージュ (Ibn as-Sarrāğ [d. 928])、アッ・ザッジャージー (az-Zağğāgī [d. 949 or 953])、アブー・アリー・アル・ファーリスィー ('Abū 'Alī al-Fārisī [d. 987]) らは「バスラ」に属し、イブン・シュカイル (Ibn Šuqayr [d. 927]) やアブー・バクル・イブン・アル・アンバーリー ('Abū Bakr ibn al-'Anbarī [d. 939 or 940])<sup>19)</sup> は「クーファ」に属するとされる。しかし、文法家によっては、バスラ学派とクーファ学派の両方の文法家に師事することもあった。イブン・アッ・サッラージュは、バスラ学派の大御所アル・ムバッラドの愛弟子であるにもかかわらず、文法用語や文法的見解の一部に、いわゆる「クーファ学派」的な側面を持ち合わせている<sup>20)</sup>。

### 3. ヴァイルの説

以上でみたような伝統的な文法史に異議を唱えたのが、ヴァイル (G. Weil) である。彼の主張は、イブン・アル・アンバーリーの『クーファ学派とバスラ学派の相違に関する公平な判断 *al-'Inṣāf fī Masā'il al-Ḥilāf bayna an-Naḥwiyyīn al-Baṣriyyīn wa al-Kūfīyyīn*』を校訂した際の序論 (Einleitung) において展開された。これによると、「バスラ」と「クーファ」の二分法は「過去への投影」にすぎず、両学派で繰り広げられたとされる論争は、「アル・ムバッラドより後の世代の人々による作り話 (*eine literarische Fiktion der Generation nach Mubarrad*)」であると断じた<sup>21)</sup>。ヴァイルの説を成り立たせる有力な根拠のひとつには、スィーバワイヒ、アル・ファッラー、アル・ムバッラドなど9世紀以前の文法家の著作には両学派についての言及が非常に少ないのに、10世紀以降のアッ・スィーラーフィー [d. 979] やイブン・ジンニー [d. 1002] には学派の相違が頻繁に記述されているという事実がある<sup>22)</sup>。

ヴァイルに続き、パレ (R. Paret) やフライシュ (H. Fleisch) らも、両文法学派が実在したということには否定的であった。パレは、いわゆる「クーファ学派」の文法家集団なるものは、「バスラ学派」的文法学の正統なる継承者を自任する後世の学者たちが、自分たちが直面している文法的見解の相違が過去にも存在したはずであると考えてることによって作り上げたものである

17) *Mağālis al-'Ulamā'*, 123.

18) Carter 2000, 264-5.

19) *Ṭabaqāt* 153-4; *Fihrist* 112; *Nuzha* 231-7; *Inbāh* III, 201-8; *Bugya* I, 212-4. 本稿では、12世紀の「イブン・アル・アンバーリー」と区別するため「アブー・バクル」を付けた名称で呼ぶ。

20) Yūsuf 2000, 519 ff.; 岡崎 2009, 37-9.

21) Weil 1913, 59.

22) Weil 1913, 54-5.

と述べている<sup>23)</sup>。また、フライシュによれば、クーファ学派の文法家による著作は、「例外的な文法的解釈を寄せ集めたもの (une somme d'explications particulières)」にすぎないとする<sup>24)</sup>。

ヴァイルの説の発表を契機として、バスラとクーファの両学派に関する歴史的信憑性についての議論が始まった。上述のように、「バスラ」と「クーファ」に関する言及が最初に現れるのはどの文献であるかという点についても、様々な見解が示されてきた。ヴァイルは、“集団としての (als einer Einheit)” バスラの人々に言及したのは、アル・ムバッラドが *al-Kāmil* において行ったのが最初であったとする<sup>25)</sup> のに対し、バアルバッキー (R. Baalbaki) は、イブン・アッ・スイッキートが *'Islāh al-Mantiq* において「バスラの人々」を、文法的側面で、集団として言及しているとの見解を示し、ヴァイルの想定より約半世紀前に、文法学派が認知されていたと主張する<sup>26)</sup>。バアルバッキーの見解に対しては、カーターが、バスラとクーファを明確に区別する文献で、現存する最古のものはアッ・ザッジャージーの *al-'Idāh fi 'Ilal an-Nahw* であるとして反論している<sup>27)</sup>。

純粋にクーファ学派的な文法理論を伝える包括的な文法書が現存しないことも、このような議論が起こった背景にある。我々が知り得る「クーファ学派」の文法に関する情報のほとんどは、10世紀以降の「バスラ学派」の文法家による二次的文献である。文法的見解の相違 (*masā'il ḥilāfiyya*) を扱った基本的文献としての地位を確立している、前述のイブン・アル・アンバーリーの *al-'Inṣāf* にしても、12世紀に書かれたものである。カーターが言うように、「雲を掴むような捉えどころのない問題<sup>28)</sup>」に、多くの研究者が労力を費やしても未だ明確な結論が出ていないのには、以上のような理由がある。

#### 4. 人間関係からみたサアラブ

近年の研究においては、種々の文献における文法議論についての検証が行われ、アラビア語文献で記されてきた「バスラ」と「クーファ」の二分法は、各々の学説や理論及び方法論に関する相違といった側面によってのみ規定されるべきものではなく、むしろ、師弟関係が知識の継承において極めて重要な役割を果たしていた時代における社会的な人間関係といった側面からの考察を重視すべきであるとの主張もみられる<sup>29)</sup>。

以下では、サアラブに関する種々の文法家列伝の記述<sup>30)</sup> を整理し、サアラブを取り巻く人間関係、特に、クーファ学派内での他の文法家との関わりと、バスラ学派の文法家との関係に

23) *El*<sup>1</sup>, Ta'labの項。

24) Fleisch 1957, 10.

25) Weil 1913, 57.

26) Baalbaki 1981, 7.

27) Carter 1994, 388.

28) Carter 1994, 399.

29) Bohas et al. 1990, 7; Bernards 1997, 93-7; 2005, 129-31.

30) *Marātib* 95-96; *Ṭabaqāt* 141-50; *Fihrist* 110-11; *Ta'rīḥ Bagdād* V, 204-12; *Nuzha* 202-5; *Iršād*, II, 55-78; *'Inbāh* I, 173-86; *Wafayāt* I, 102-4; *Bugya* I, 396-98; Flügel 1862, 164-68; Sezgin 1984, 14-42.

ついでに考察を通して、9世紀のバグダードの文法学をめぐる状況をまとめる<sup>31)</sup>。

一般的に「サアラブ(狐)」の通称で呼ばれるが、本名は 'Abū al-'Abbās 'Aḥmad b. Yaḥyā b. Zayd b. Sayyār aš-Šaybānīという。815-6年にバグダードで生まれ、904年4月2日に事故死するまで、生涯をそこで過ごした。バグダード総督のムハンマド・イブン・アブドゥッラー・イブン・ターヒル (Muḥammad b. 'Abdullāh b. Ṭāhir [d. 870])<sup>32)</sup>の知遇を得て、宮廷内の子弟たちの教育を担った。40を超える書物を著したと伝えられるが、特に、*Maḡālis Ta'lab* (Hārūn校訂, 1948年)は、断片的ながらも9世紀の文法学及び周辺諸学に関する貴重な情報を提供している。サアラブの代表的な弟子には、アル・アフファシュ・アル・アスガル (al-'Aḥfaš al-'Aṣḡar [d. 927])<sup>33)</sup>、アブー・バクル・イブン・アル・アンバーリー ('Abū Bakr ibn al-'Anbārī [d. 939 or 940])、ハールーン・イブン・ハーイク (Hārūn ibn Ḥā'ik [死亡年不明])<sup>34)</sup>がいる。

#### 4. 1. クーフア学派内のサアラブ

サアラブは、16歳でアラビア語の学習を始め、25歳までにアル・ファッラーの主要著書をすべて暗記したという<sup>35)</sup>。しかしながら、アル・ファッラーが死亡した822年には、サアラブはわずか7、8歳であったので、直接教えを受けたことはない。その弟子サラマ・イブン・アースィム (Salama b. 'Aṣim [d. ca. 854])に文法 (naḥw) を学び、アル・キサーイーの弟子ムハンマド・イブン・ズィヤード・イブン・アル・アラービー (Muḥammad b. Ziyād b. al-'A'rābī [d. 845])に辞書学・語彙論 (luḡa) を学んだ<sup>36)</sup>。バスラ学派のアッ・リヤシー (ar-Riyāšī [d. 870])にも教えを授かったが<sup>37)</sup>、バスラの文法理論には批判的であった。

アル・ファッラーについて、サアラブが語ったとされる言葉をイブン・アン・ナディームが伝えている。「アル・ファッラーは、その著作において哲学者然としたところがあった。つま

31) サアラブが生まれ育った時代のバスラ、クーフア、バグダードにどの程度の文法家があったのかに関して正確な記録はないが、バーナーズは、文法家列伝をはじめ、およそ90の文献に記載のある文法家を調査した。その結果、イラクで活動し、何らかの形で他の文法家と交流があった文法家で、ヒジュラ歴200-250年(西暦815-865年)に死亡した者の総数を35人(内訳:バスラ20人、クーフア13人、不明2名)であるとしている。Bernards 2005, 132-3.

32) フラーサーン地方総督たちのターヒル朝3代目アブドゥッラー・イブン・ターヒル ('Abdullāh b. Ṭāhir)の息子のひとり。カリフ、アル・ムタワッキルによってバグダード総督に任命され、文化事業にも力を注いだことで知られる。サアラブとは857年に出会って以降、親交を結び、ムハンマドが死ぬ870年まで交友関係が続いた。ターヒル家の文化活動全般については、Bosworth 1969を参照。

33) 「アル・アフファシュ」の俗称で呼ばれる3人のうちのひとり。本名は 'Alī b. Sulaymān b. al-Faḍl. アル・ムバッラドとサアラブの両者から教えを受けた。Nuzha 219; 'Inbāh II, 276-8; Bugya II, 167-8.

34) ヒーラ出身のユダヤ教徒。サアラブに忠誠を誓い Gulām Ta'lab (サアラブの丁稚) と呼ばれた。Tabaqāt, 151-2; Fihrist, 111-2; 'Inbāh III, 359-61; Bugya II, 319.

35) Fihrist, 110; Ta'rīḥ Bagdād V, 205; Nuzha, 203; 'Iršād II, 58, 64; 'Inbāh I, 174; Wafayāt I, 102; Bugya I, 396.

36) Marātib, 152; 'Iršād II, 64; Bugya I, 396.

37) 'Inbāh II, 372.

り、言葉づかひの点で、哲学者に倣っていた。wa-kān-a l-farrā'-u ya-tafalsaf-u fī ta'lifāt-i-hi wa-mušannafāt-i-hi ya-'nī ya-sluk-u fī 'alfāz-i-hi kalām-a l-falāsifat-i<sup>38)</sup>」この他にも細部は異なるが、アル・キフティ、イブン・ハッリカーン、アッ・スユーティの文法家列伝にも同様の言葉が引用されている<sup>39)</sup>。

サアラブはアル・ファッラーと同様、代々バグダード総督を務めたターヒル家に重用された。特に、ムハンマド・イブン・アブドゥッラー・イブン・ターヒルはサアラブを最良にし、個人的な交友関係を深めた。毎月千ディルハムを支払い、邸宅内に特別な部屋まで用意して、息子の家庭教師を任せたともしられる<sup>40)</sup>。

総督ムハンマドは、数詞の用法を誤って「千ディルハム」を常々 'alf dirham wāḥida のように女性形を使っていた。書記たちは、そのことを指摘するのをためらっていたが、ある日、ムハンマドがサアラブに尋ねた。「何ゆえにアル・ファッラーが『ハーの書 *Kitāb al-Hā'*』を書いたかを知っているか。我が祖父ターヒルの命により、父アブドゥッラーに献本したのだ。」これを聞いたサアラブはすかさず言った。「アル・ファッラー師は『男性形と女性形の書』をお書きになりました。'alf dirham wāḥid などと書いてある本です。」このようにして、それとなく総督の文法的誤りを指摘したという<sup>41)</sup>。

サアラブと同時代のクーファ学派の文法家、イブン・アッ・スィッキートとの関係について、アブー・アッ・タイブは、次のように伝えられている。「二人とも信頼のおける権威であった。イブン・アッ・スィッキートのほうが年上で、死亡したのも早かった。著作については、イブン・アッ・スィッキートが優れていたが、文法知識についてはサアラブが優れていた。ヤアクーブ<sup>42)</sup>は、二倍の知識を持っていた<sup>43)</sup>。」。

また、サアラブが語ったこととして、イブン・アッ・スィッキートがある問題について尋ねた時、サアラブが激怒して声を荒げると、「大声を出さないでください。神に誓って、単に質

38) *Fihrist*, 99.

39) '*Inbāh* IV, 7; *Wafayāt* V, 228; *Buḡya* II, 411. cf. Flügel 1862, 132; Goldziher 1877 (1994), 47. ただし、この言葉をサアラブの著作で直接確認することはできない。タルモンは、サアラブのアル・ファッラーに対する批判ではないとの認識を示し、アル・ファッラーの *Ma'ānī al-Qur'ān* にみられるアリストテレスの論理学に強く影響を受けた文法理論の検証を通して、アラブ文法学初期の形成過程における外来の影響と、サアラブの言葉とを関連付けて論じている。Talmon 1990, 266-79.

40) '*Iršād* II, 67-8; '*Inbāh* I, 184.

41) '*Iršād* II, 61; *Buḡya* I, 396; Fück 1955, 120; Bosworth 1969, 69.

42) イブン・アッ・スィッキートを指す。

43) *Marātib*, 151. これに関し、ヤークートはアブー・アッ・タイブからの引用としながらも、正反対の記述を行い、サアラブの有能さを強調している。「サアラブのほうが年上で、死亡したのも早かった。著作についても、文法知識についても、サアラブが優れていた。ヤアクーブは文法に弱かった。」'*Iršād* II, 68. イブン・アッ・スィッキートは、アル・ファッラーにも直接教えを受け、858年又は860年に死亡したとされる。したがって、815-6年生まれのスアラブより年上であり、少なくとも年齢と死亡年については、アブー・アッ・タイブの方が正しく伝えている。cf. *Fihrist*, 108; '*Inbāh* IV, 57, 59; *Buḡya* II, 349.

問をただけです。」と答えたという<sup>44)</sup>。一方で、サアラブはイブン・アッ・スィッキートを評価していたことはうかがえる。イブン・ハッリカーンは、サアラブの言葉として次のように伝えている。「イブン・アル・アラービーに続く辞書学者は、イブン・アッ・スィッキートをおいて他にいないという点で、我々の仲間内での見解は一致している<sup>45)</sup>。」

「慣行 (sunna) が言語 (luġa) を決定づけるのであって、言語が慣行を決定づけるのではない<sup>46)</sup>。」というサアラブ自身の言葉は、イスラーム諸学の中での文法学及び文法家が果たす役割を模索していたことをうかがわせ、法学と文法学とが密接に関連しているとの認識を反映しているものと考えられる。また、文法家であることの意味をサアラブが問い直して、バグダードのクルアーン読誦者、イブン・ムジャールヒド (Ibn Muġāhid [d. 936]) に尋ねたという話が伝えられている。「アブー・アル・アッパース・サアラブが私に尋ねた。“アブー・バクルよ。クルアーン学者はクルアーン研究に従事し功を成す。法学者は法学研究に従事し功を成す。ハディース学者はハディース研究に従事し功を成す。自分はと言えば、ザイドとアムル<sup>47)</sup>に従事しているが、この先いったいどうなるのか知りたいものだ。”サアラブと別れたその夜、夢の中で預言者ムハンマドが私にこうおっしゃった。“彼によろしく伝えなさい。あなたは、永久に続く学問を研究しているのだと。”<sup>48)</sup>」アラビア語文法学が、法学 (fiqh)、神学 (kalām)、クルアーン解釈学 (tafsīr) といったイスラーム諸学及びそれらの学問をめぐる議論や教育にとって必須の学問として十分に認識されておらず、イスラーム諸学の枠組みの中での地位を未だに確立できていなかったことを物語る言葉である<sup>49)</sup>。

#### 4. 2. サアラブとバスラ学派の文法家

イブン・ハッリカーン [d. 1282] が、アル・ムバッラドとサアラブの「二人によって、アディーブの歴史の幕は下りた<sup>50)</sup>」と述べているように、「バスラ学派」のアル・ムバッラドと、「クーファ学派」のサアラブは、9世紀バグダードの両雄として、常に対照的に伝えられてきた。アル・ムバッラドの書写助手 (mustamlī) であったといわれる文法家、アブー・バクル・イブン・アブー・アル・アズハル (ʿAbū Bakr b. ʿAbī al-ʿAzhar) が詠んだ称讃詩が多くの文法家列伝で紹介されている<sup>51)</sup>。

44) *Maratib*, 151; *ʿIršād* II, 68. アル・キフティール [d. 1248] も同じ話を伝えているが、より詳しい描写を行う。それによると、イブン・アッ・スィッキートが名詞の語末変化 (ʿirāb) について尋ねたのがきっかけであり、最終的にサアラブが恥じ入ったという話を加えている。ʿ*Inbāh* I, 183.

45) *Wafayāt* VI, 399.

46) *Maġālis*, 179.

47) 文法解説の例文で用いられる人名。正書法や名詞の格変化などの分析を表した譬え。

48) *Taʿrīḥ Baġdād* V, 211; *Nuḥa* 204-5; *ʿIršād* II, 74-5; *ʿInbāh* I, 178-79; *Wafayāt* I, 102-3; *Buġya* I, 397.

49) cf. *Mufaṣṣal*, 3; Versteegh 1989, 290; Bernards, 1997, 35-36.

50) *Wafayāt* IV, 314.

51) *ʿAḥbār*, 105; *ʿIršād* II, 65; *Wafayāt* IV, 314; *Buġya* I, 271. (英訳: Nicholson 1907, 344; Bernards 1997, 30.)



知識を求む者よ。不知を避け、アル・ムバッラドかサアラブに尋ねよ。

両者のもとに、人類の叡知を目にするはず。皮膚を病む駱駝になるべからず。

東と西の、この世の諸学、二人によって繋がる。

両者の学識の高さは、アル・ムバッラドの愛弟子、イブン・アッ・サッラージュの言葉からもうかがえる。彼は、アル・ムバッラドとサアラブのどちらが識者かを問われた時、「私に二人について何を話せと言うのか。二人の間には全世界が横たわっているというのに<sup>52)</sup>。」と答えたという。また、ウバイドゥッラー・イブン・アブドゥッラー・イブン・ターヒルは、兄のマジリスに出席し、アル・ムバッラドとサアラブが議論を交わす様を目の当たりにした。彼は両者のうちどちらが学者として優れているかを知りたいと思ったが、議論についてゆけず、両者より優れた者のみがあるその判断を下すことができるとの結論に至ったという<sup>53)</sup>。

一方で、両者の個人的な性格に関するネガティブな評価も伝えられる。アブー・バクル・ムハンマド・イブン・アブド・アル・マリク・アッ・ターリーヒー・アル・バグダーディー (*‘Abū Bakr Muḥammad b. ‘Abd al-Malik al-Ta’rīḥī al-Baġdādī*) が伝えるところによれば、「何事につけ強欲である点で、アル・ムバッラドに勝る者はいない。(中略) サアラブは、裕福さでは勝っていたのに、強欲さではアル・ムバッラドと同様であった<sup>54)</sup>。」

10世紀のバスラ学派の文法家アッ・ザッジャージーは、*Mağālis al-‘Ulamā’*の中で、バグダード総督、ムハンマド・イブン・アブドゥッラーの邸宅内で交わされた、アル・ムバッラドとサアラブの間の議論を大きく扱っている<sup>55)</sup>。サアラブとアル・ムバッラドが、どの程度の頻度で会っていたかは不明であるが、アッ・ザッジャージーの記述から判断する限り、両者がそれぞれ「初めて」の座談会であると述べている個所があり、複数回会っていたことは推測できる<sup>56)</sup>。この中で、バスラ学派の「キヤース」重視と、クーファ学派の「サマア」重視の文法観の違いをとり上げ、両者の対立を次のように描いている。アル・ムバッラドはサアラブを見下して、「年老いた遊牧民の女性の言葉を鵜呑みにして、クルアーンの用法や一般的な用法を放棄した」と言って非難したという<sup>57)</sup>。

52) *Ta’rīḥ Baġdād* V, 209; *‘Iršād* II, 74; *‘Inbāh* I, 176.

53) *Ta’rīḥ Baġdād* V, 208; *‘Inbāh* I, 175-6.

54) *Ṭabaqāt*, 106-7

55) *Mağālis al-‘Ulamā’*, 84-5, 86-7, 91, 94-7, 98-9, 253-4, 265. また、アル・ムバッラド以外に、サアラブと議論を交えた学者には次のような者がいると伝えられている。アッ・リヤシー、ムハンマド・イブン・サッラーム (*Muḥammad b. Sallām*)、ムハンマド・イブン・ハビーブ (*Muḥammad b. Ḥabīb*)、ムハンマド・イブン・サアダーン (*Muḥammad b. Sa’dān*)、イブン・アル・アアラービー、ムハンマド・イブン・アブドゥッラー・イブン・ターヒル、アル・マーズィニー、アッ・ザッジャーージュ、ムハンマド・イブン・カーディム (*Muḥammad b. Qādīm*)、イブン・カイサーン (*Ibn Kaysān*)。 *Mağālis al-‘Ulamā’*, 47-8, 72, 75, 77, 78, 79, 81, 82, 92, 107, 244.

56) *Mağālis al-‘Ulamā’*, 84, 98. cf. Versteegh 1977, 110; Bernards 1997, 29.

57) *Mağālis al-‘Ulamā’*, 95.

アッ・ザッジャージーが伝える情報からは、アル・ムバッラドとサアラブが生涯にわたってライバル関係にあり、激しく論争を交わしていたとの印象を受けるが、この文献を除けば、両者の論争に言及したものは少ない。さらに、サアラブの *Mağālis* にはアル・ムバッラドにふれた部分が見られない<sup>58)</sup> ことから、アッ・ザッジャージーの *Mağālis al-'Ulamā'* の記述のみから両者の対立について断定的なことを言うことはできない。

サアラブと他のバスラ学派の文法家との関係については、*Mağālis al-'Ulamā'* 以外にも、他の文法家列伝で断片的な記述が多く見られるが、全般的には、誹謗中傷の言葉が目立つ。イブン・アン・ナディームが伝えるように、サアラブはバスラ学派を非難して、「スィーバワイヒは *al-Kitāb* の42人の筆者の一人にすぎない<sup>59)</sup>」と発言したとされている。サアラブが、バスラ学派のアッ・ザッジャージュ (*az-Zağğāg* [d. 923]) に、「アル・ムバッラドが *al-Muqtaḍab* を口述筆記させた時、舌がもつれてうまく続けることができなかった。」と言って非難すると、同じくクーファ学派のアブー・ムーサー・アル・ハーミドがさらに畳み掛けて、「あなた方の偉大な師、スィーバワイヒは、舌が思うように回らず、考えを相手にうまく伝えることができない。」と断じた<sup>60)</sup>。

サアラブには多くの弟子の文法家がいたが、中には彼のもとを去って、バスラ学派に転向した者もいる。前述のアッ・ザッジャージュもそのひとりで、一時期サアラブのもとで学んでいた。アル・ムバッラドがバグダードにやってきた時、大規模な円座講義 (*ḥalqa*) が催されたので、サアラブは興味を抱いて、弟子のアッ・ザッジャージュとイブン・ハーイクの二人を遣わして様子を探ることにした。ところが、アッ・ザッジャージュは、忽ちアル・ムバッラドの文法理論に心を惹かれ、サアラブのもとを去ってアル・ムバッラドに弟子入りすることにした。アル・ムバッラドはアッ・ザッジャージュにクーファ学派の本を捨てるよう命じ、その後、*Kitāb Sībawayhi* の公認写本を与えたといわれる<sup>61)</sup>。

イブラーヒーム・イブン・ムハンマド・イブン・アラファ・ニフタワイヒ (*'Ibrāhīm b. Muḥammad b. 'Arafa Niftawayhi* [d. 935]) もアル・ムバッラドとサアラブの両者から教えを受け、バスラとクーファの理論を統合したと伝えられている<sup>62)</sup>。

アフマド・イブン・ジャアファル・アブー・アリー・アッ・ディーナワリー (*'Aḥmad b. Ġa'far 'Abū 'Alī ad-Dīnawarī* [d. 902]) は、バスラでアル・マーズィニーより *Kitāb Sībawayhi* を継承するイジャーザを得た。その後、バグダードに移り住み、サアラブの娘と結婚したが、「お前がああ男のところに通っていることがわかったら、世間は何と言うだろう。」と言って反対するサアラブには耳を貸さず、アル・ムバッラドのところに通って学んだ<sup>63)</sup>。

58) Bernards, 1997, 28

59) *Fihrist* 76.

60) *'Inbāh* III, 141.

61) *Ṭabaqāt*, 109-10; *Nuzha*, 137. cf. *Ta'riḥ Bagdād* III, 381.

62) *Fihrist*, 121; *Nuzha*, 156-8; *'Inbāh* I, 211-7; *Bugya* I, 428-30.

63) *Ṭabaqāt*, 215; *'Inbāh* I, 68-9; *Bugya* I, 301.

## 5. *Mağālis* にみる文法論争

サアラブの *Mağālis* は、その名の通り“座談集”であり、主として、語の意味や使い方に関する学者の見解を書きとめたという構成をとっている。このため、いわゆる文法書に属するものではなく、様々な文法問題に関する見解が包括的に記述されていることを期待できるものではない。しかしながら、9世紀の文献の中では、語彙論や形態論に加え統語論までも扱ったものとして、また、クーファ学派の側から書かれたものとして、数少ない資料の一つに数えられる。

前述の「ヴァイルの説」が成立する最も重要な根拠の一つは、「バスラ学派」「クーファ学派」に関する言及が、9世紀の文献と比較して、10世紀の文献に飛躍的に多く見られるという点である。ここで、ヴァイルが9世紀の文献として想定しているのは、主として「バスラ側」のアル・ムバラドによる *al-Kāmil* や *al-Muqtaḍab* であり、「クーファ側」の文献である *Mağālis* は想定していないようである<sup>64)</sup>。

10世紀よりも前の時代において、「バスラ」と「クーファ」の文法学派が実在していたかどうかを検証するために、「学派」に関する記述がどのような形で見られるか、また、個々の文法家が「学派」をどの程度意識していたかという観点から研究がなされてきている。しかし、前述のように、文法学派に関する記述が見られる最古の文法書は何であるかという点については、研究者によって意見が分かれている。8世紀末から9世紀初頭にかけてのスィーパワイヒやアル・ファッラーの著作には、個別の文法家の名前は頻繁に見られるものの、「バスラ」や「クーファ」といった枠組みで「文法家集団」を括っている部分を認めることは困難である。アル・アフファシュ・アル・アウサトにも、同様の事が言える<sup>65)</sup>。クーファ側の資料においても、イブン・アッ・スィッキートの *'Islāḥ al-Manṭiq* には、数詞と定冠詞をめぐる「バスラの文法家 *'ahl al-bašra*」の見解が記されている部分が一か所だけ見られるにとどまる<sup>66)</sup>。*Kitāb al-'Alfāz* にも、一か所だけ「バスラの文法家」が見られるが<sup>67)</sup>、「クーファの文法家」という表現は確認できない。アル・ムバラドの著書においても、「バスラ」への言及は少なく、「クーファ」には一回のみ言及している。また、*maḏhab*<sup>68)</sup> の語も限定的に使用するのみである。

実際には、クーファ側の資料でも、アル・ファッラーの『クルアーンの意味 *Ma'ānī al-Qur'ān*』においては、「バスラ」や「クーファ」等の地名と *'ahl* (原義は“一族”) の語を組み合

64) Hārūn 校訂 *Mağālis* の出版は1948年。Baalbaki 1981, 2.

65) Bernards, 1997, 14.

66) *'Islāḥ*, 302. バアルパッキーは、この部分が「バスラ」を文法家集団として記述している最古のものであると考える。Baalbaki 1981, 7.

67) *'Alfāz*, 347.

68) 「学派, 方法論, 様式, 考え方」等、様々な意味で用いられ、「学派」と解釈するには注意が必要である。cf. Bohas et al. 1990, 7; Bernards 1997: 11-14; Carter, 2000, 270-1. 「文法学派」の意味で *madrasa* の語が用いられる伝統について、バーナーズは、アル・マフズミー (al-Maḥzūmī 1955) が最初であるとみなす。これに対し、カーターは、*maḏhab* の用語に取って代わり、*madrasa* の用語がアラビア語の二次文献でしばしば用いられるのは、おそらくはフリューゲル (Flügel 1862) に起因すると考える。Bernards 1997, 11; Carter, 2000, 264.

わせたり、関連形容詞を複数形にして、学者集団を指しているとみられる表現が散見される。「クーファの学者 'ahl al-kūfa<sup>69)</sup>, kūfiyy-ūn<sup>70)</sup>」「バスラの学者 'ahl al-bašra<sup>71)</sup>, bašriyy-ūn<sup>72)</sup>」「マッカの学者 'ahl makka<sup>73)</sup>」「マディーナの学者 'ahl al-madīna<sup>74)</sup>」「ヒジャーズの学者 'ahl al-ḥiǧāz<sup>75)</sup>」「ナジドの学者 'ahl naǧd<sup>76)</sup>」「シャームの学者 'ahl aš-šām<sup>77)</sup>」などである。さらに、「仲間の学者たち 'ašḥāb-u-nā<sup>78)</sup>」という表現もみられることから、地理的な観点から学者集団をとらえていたこと推察される。ただし、バアルバッキーが指摘する<sup>79)</sup>ように、*Ma'ānī al-Qur'ān*にみられる 'ahl al-kūfa や kūfiyy-ūn という表現は、クルアーン読誦術 (qirā'a)<sup>80)</sup>に関するものに限られるため、「クーファの文法学派」を指しているという根拠としては弱い。

また、9世紀の文献においては、個別の文法家に対する言及が限定的であるという傾向が見られる。バーナードズ (M. Bernards) によれば、アル・ファッラーの *Ma'ānī al-Qur'ān* だけでなく、『男性形と女性形 *al-Mudakkār wa al-Mu'annat*』にも、「スィーバワイヒ」に対する言及が全くみられないという<sup>81)</sup>。

このような9世紀の文献全般にみられる傾向と比較すると、サアラブの *Maǧālis* における「学派」に関する言及は多いと言ってよいだろう。Hārūn 校訂の目次で確認するかぎり、個別の文法家に関する言及が多くみられ、「クーファ」の学者では al-Farrā' 77回、Ibn al-'A'rābī 52回、al-Kisā'ī 39回、「バスラ」の学者では Sībawayhi 13回、al-'Aḥfaš 6回、al-Ḥalīl ibn 'Aḥmad 5回、al-Māzinī 4回などと続く<sup>82)</sup>。また、'ahl al-bašra 16回、al-bašriyy-ūn 3回、'ahl al-kūfa 2回<sup>83)</sup>などように、「バスラ」「クーファ」をそれぞれ文法家集団として捉えている箇所が多くみら

69) *Ma'ānī* I, 338; II, 155, 240, 243; III, 52, 61, 114, 142, 214, 270.

70) *Ma'ānī* III, 61.

71) *Ma'ānī* II, 42, 128, 240, 312; III, 52, 142, 170, 214, 270.

72) *Ma'ānī* I, 238.

73) *Ma'ānī* III, 61, 143.

74) *Ma'ānī* II, 240, 242, 243; III, 52, 170, 269.

75) *Ma'ānī* II, 42, 155; III, 142.

76) *Ma'ānī* II, 42.

77) *Ma'ānī* III, 114.

78) *Ma'ānī* II, 45; III, 170, 242.

79) Baalbaki 1981, 5.

80) キラーアについての包括的な解説は、堀内1976; 池田1982, 128-34を参照。

81) Bernards 1997, 10. その他、アル・アフファシュの『クルアーンの意味 *Ma'ānī al-Qur'ān*』、アル・マーズィニーの『語形変化の書 *Kitāb at-Tašrif*』なども「スィーバワイヒ」に言及していないという。

82) cf. Owens 1990, 207, 257-8; Bernards 1997, 14-5.

83) 'ahl al-bašra, 'ahl al-kūfa, bašriyy-ūn, kūfiyy-ūnを用いる例: *Maǧālis*, 44, 58, 106, 359, 419. cf. Versteegh 1977, 110.

84) この点は、ヴァイルの仮説とは異なる。Weil 1913, 76. また、イブン・カイサーン [d. 320] が「クーファの文法家の考えを採用したすべての者に、kūfiという総称的な呼び名を与えた最初の人物」とした Fleisch の主張とも異なる。EI<sup>2</sup>, Ibn Kaysānの項。

れる<sup>84)</sup>。さらに、自らをクーファ学派であると認め、バスラ学派の主張に対しクーファを擁護する姿勢がみられる箇所や<sup>85)</sup>、「仲間の文法家たち (‘aṣḥāb-u-nā)」の表現も見られる<sup>86)</sup>。また、madhabを1回のみ使用しているが<sup>87)</sup>、前後の文脈から「学派」の意味ではなく、「見解、意見」などの意味で用いられている。なお、バーナーズの指摘したとおり、アル・ムバッラドに関する言及が皆無である<sup>88)</sup>。

学派間、文法家間の論争に関連する部分は多くみられるが<sup>89)</sup>、それらすべてが、後の12世紀にイブン・アル・アンバーリーによって学派間対立として採用されたわけではない<sup>90)</sup>。また、「バスラ」と「クーファ」の対立のみが記されているわけではなく、同じクーファ学派の中でも、アル・キサーイーとアル・ファッターの対立を記述した個所がみられる<sup>91)</sup>。

サアラブには、アル・キサーイーとアル・ファッターの二人を、‘ahl al-kūfa と同格においた表現がみられる。「クーファの学者たち、つまり、アル・キサーイーとアル・ファッターは、次のような見解を示している。(dahab-a ‘ahl-u al-kūfat-i, al-kisā’iyy-u wa-l-farrā’-u, ‘ilā ‘anna …)」<sup>92)</sup>これに類するものとして、10世紀のバスラ学派の文法家イブン・アッ・サッラージュの、「クーファの学者たち—これはアル・ファッターの意見であるが—はこのように言う。(wa-qāl-a al-kūfiyy-ūna wa-huwa ra’y-u al-farrā’-i)」<sup>93)</sup>との表現がある<sup>94)</sup>。

## 5. 1. サアラブの文法用語

ヴァイルの説に対する反論として、バスラ学派とクーファ学派の文法用語の違いが歴然としているという事実がある<sup>95)</sup>。

スィーバワイヒの *al-Kitāb*、アル・ムバッラドの *al-Muqtaḍab*、イブン・アッ・サッラージュの *al-‘Uṣūl fī an-Nahw* と続く、8世紀から10世紀にかけてのバスラ学派を代表する文法書の変遷を通して、文法用語が徐々に確定していくとともに、一つの概念を表す用語が、文法家ごと

85) *Maḡālis*, 124, 133, 178, 217, 249, 272-3, 552.

86) *Maḡālis*, 265, 409, 418, 596.

87) *Maḡālis*, 354.

88) Bernards 1997, 28.

89) *Maḡālis*, 44, 58, 106, 127, 174, 196, 216, 310, 343, 354.

90) サアラブが指摘する議論が、イブン・アル・アンバーリーにも取り入れられている例：*Maḡālis*, 127, 262, 552; *‘Inṣāf*, 185, 585, 652-4. 一方、サアラブは指摘しているが、イブン・アル・アンバーリーには採用されていない例：*Maḡālis*, 216, 249, 310.

91) *Maḡālis*, 354, 419, 446, 487.

92) *Maḡālis*, 359.

93) *‘Uṣūl* II, 7.

94) バアルバッキーは、「(ヒジュラ歴) 3世紀の文法家にとってさえも、ある文法の見解がある学派に属すると言ったとき、必ずしもその学派の文法家全員を含まないことを意味する」との見解を示している。Baalbaki 1981, 24-5.

95) cf. Versteegh 1993, 192.

に異なり、複数の用語が混在しているという状況が改善されていった。「バグダードにおける文法研究の黄金期<sup>96)</sup>」と言われる10世紀を代表するイブン・アッ・サッラージュの文法書が、後の時代に高い評価を得て、「*al-'Uṣūl* によって正常な状態にするまでは、文法はずっと錯乱状態にあった<sup>97)</sup>」とまで言われたのは、各文法事項の徹底的な分類と章立とともに、この時代までにある程度、文法用語が定まったという側面も大きい。このように、9世紀までの文法用語は、学派にかかわらず、不安定な状況が続いており、同じ学派内において文法用語が統一されていたわけではない。以下では、バスラとクーファとで異なるとされている主な文法用語<sup>98)</sup> について、アル・ファッラーの *Ma'ānī al-Qur'ān* と、サアラブの *Mağālis* での使われ方をまとめる。

### 5. 1. 1. badal と tabyīn

アル・ファラズダク [d. 732] の詩の一節 « 'alā sā'at-in law 'anna fī l-qawm-i ḥātim-an 'alā ḡūd-i-hi mā ḡād-a bi-l-mā'-i ḥātim-i » に関し、ḥātim-i は ḡūd-i-hi の人称代名詞 -hi とは同格である。アル・ムバッラドはこれを *tabyīn* と表現し、バスラ学派は *badal* と呼ぶと記述している<sup>99)</sup>。

バスラ学派が *badal* の用語を使う点については、スィーバワイヒヤアル・ムバッラドの著書において容易に確認することができる<sup>100)</sup>。

クーファ学派内でも実際には、様々な用語が併存しており、*Šarḥ al-'Uṣmūnī* には、文法家による用語の違いについての指摘がある。「バスラ学派の用語では *badal*、アル・アフファシュによれば、クーファ学派は、*tarḡama* や *tabyīn* と呼ぶ。また、イブン・カイサーンによれば、クーファ学派は *takrīr* と呼ぶ<sup>101)</sup>。」

上記のような学派ごとの使い分けに関する記述に反して、アル・ファッラーの *Ma'ānī al-Qur'ān* には、*tabyīn* はみられず<sup>102)</sup>、*tafsīr*<sup>103)</sup>、*takrīr*<sup>104)</sup>、*tarḡama*<sup>105)</sup> など複数の用語が併存していることが確認できる。

サアラブの *Mağālis* では、*badal* が2か所で用いられている<sup>106)</sup> が、バスラ学派の主張を紹介している部分での使用であり、サアラブが *badal* を主として用いているか否かを確認すること

96) Troupeau 1962, 318.

97) *'Iršād* V, 341; *Buḡya* I, 109.

98) cf. Weil 1913, 72; al-Maḥzūmī 1958, 306-16; Versteegh 1993, 12.

99) *Kāmil* I, 301. 他にも多くの文献で、この詩を例証として “*badal*” の解説を行っているが、用語と学派の関連には触れられていない。Luma', 35-6; *Šarḥ al-Mufaṣṣal* III, 69-70; *Šuḍūr*, 323-4.

100) *Kitāb* I, 64, 186, 192, 345; *Muqtaḍab* I, 27; IV, 295. cf. *'Uṣūl* I, 369.

101) *Šarḥ al-'Uṣmūnī* III, 3. cf. *'Uṣūl* II, 189.

102) cf. Kinberg 1996, 70, 557, 691.

103) *Ma'ānī* I, 193, 320, 348; II, 58, 69, 138, 273.

104) *Ma'ānī* I, 7, 51, 56; II, 360.

105) *Ma'ānī* II, 178.

106) *Mağālis*, 133, 557.

はできない。その他、*tafsīr* が用いられる例があるが、2か所とも *tamyīz* の意味で用いられている<sup>107)</sup>。

### 5. 1. 2. *ḡarr* と *ḥafd*

名詞や形容詞の「属格」を意味する *ḥafd* は、一般的にはクーファ学派の用語とされる。ただし、クーファ学派の学者が独占的に用いるものではなく、バスラ学派のイブン・アッ・サッラージュやアッ・ザッジャージーの著作には、*ḥafd* と *ḡarr* が使い分けされることなく、広く混在していることが指摘されている<sup>108)</sup>。

一般的に伝えられている分類通り、アル・ファッラーの *Ma'ānī al-Qur'ān* で *ḥafd* を多用することは容易に確認することができる<sup>109)</sup>。また、サアラブが *ḥafd* を用いる例は多く<sup>110)</sup>、少なくとも *Maḡālis* において *ḡarr* が使用される例を確認することはできない。

### 5. 1. 3. 'atf と *nasaq*

修飾構造のカテゴリの一つに 'atf / *nasaq* がある。*nasaq* は伝統的にクーファ学派の用語とされてきた<sup>111)</sup>。

アル・ファッラーの *Ma'ānī al-Qur'ān* では二つの用語が併存しているが、'atf が37回に対し、*nasaq* は15回と少ない<sup>112)</sup>。サアラブは、*nasaq* を2回、'atf を1回用いていることが確認できる<sup>113)</sup>。

### 5. 1. 4. *ḍamīr al-faṣl* と 'imād

バスラ学派が *ḍamīr al-faṣl* (分離代名詞) と呼ぶものを、クーファ学派は 'imād と呼ぶとされている<sup>114)</sup>。アル・ファッラーは 'imād を用い<sup>115)</sup>、サアラブにも 'imād を用いる例が数か所確認できる<sup>116)</sup>。

107) *Maḡālis*, 425, 437. なお、p. 584に *tafsīr* の語がみられるが、アル・アフファシュからの引用で、*ta'wīl* の意味を解説する際に用いられており、「解釈、解説」を意味する一般名詞である。また、*Maḡālis* では *tamyīz* の用語を確認することはできなかった。*tamyīz* とその同義語が混在して用いられる例については、岡崎2009, 38を参照。

108) *Maḡālis al-'Ulamā'*, 193; Versteegh 1995, 132, 205, 238; Carter 2000, 267; Yūsuf 2000, 534; 岡崎 2009, 37.

109) Kinberg 1996, 226 ff.

110) *Maḡālis*, 59, 60, 84, 124, 157, 158, 160, 176, 309, 323, 445, 446, 467, 487, 553, 578. (動詞 *ḥafaḍ-a* 及び分詞 *ḥāfīḍ*, *maḥfūḍ* を含む)

111) Owens 1990, 85, 94.

112) Kinberg 1996, 487, 793.

113) *Maḡālis*, 146, 324, 382; Owens 1990, 94. cf. Versteegh 1993, 10, 153.

114) 'Uṣūl II, 125.

115) Kinberg 1996, 496-9.

116) *Maḡālis*, 43, 354, 359.

### 5. 1. 5. *ibtidā'* と *isti'nāf*

文や節などの切れ目の後に「新たな文や節が始まること」を意味する用語であるが、文法用語として厳密に使われていない例も多い。フェルシュテーフによると、アル・ファッラーの *Ma'ānī al-Qur'ān* では、*isti'nāf* が頻繁に用いられ、*ibtidā'* は全く用いられないという<sup>117)</sup>。サアラブにも同じような用例がみられる<sup>118)</sup>。

### 5. 1. 6. *nafy* と *ḡahd*

一般的に、*nafy* がバスラ学派、*ḡahd* がクーファ学派の「否定」を意味する用語であるとされるが、実際にはバスラ学派の文法家も *ḡahd* を用いる例が多くみられる<sup>119)</sup>。

アル・ファッラーの *Ma'ānī al-Qur'ān* では、主として *ḡahd* が用いられているが、*nafy* を用いる例もある<sup>120)</sup>。サアラブの *Maḡālis* では、*ḡahd* が使用されており<sup>121)</sup>、*nafy* を用いる例を見出すことはできなかった。

### 5. 1. 7. *taqrīb*

アル・ファッラーが *taqrīb* と呼ぶ構造で、*hāda l-'asad-u maḡūf-an*<sup>122)</sup> (これぞライオン、恐るべきもの。)のように、指示代名詞 *hāda* に2つの名詞が後続するとき、最初の限定名詞 (a)l-'asad-u が主格をとり、2つ目の補語となる名詞 *maḡūf-an* が、あたかも動詞 *kān-a* がある場合のように、対格をとる際の説明に用いられる<sup>123)</sup>。イブン・アッ・サッラージュも *taqrīb* がクーファ学派の用語であると述べ、状況を示す対格 (*hāl*) によってこの構文を説明するバスラ学派の立場と対比させている<sup>124)</sup>。

サアラブは、この構文についてのスィーバワイヒの説明に異論を唱え<sup>125)</sup>、「これは *taqrīb* 以外の何物でもない。彼(スィーバワイヒを指す)は *taqrīb* について何も知らない<sup>126)</sup>。」と言って批判している。

### 5. 1. 8. 'abdāl

「人称代名詞」の意味で用いられる 'abdāl は、サアラブがアル・ファッラーの言葉を引用す

117) Versteegh, 1993, 135. cf. *Ma'ānī* II, 312.

118) *Maḡālis*, 20.

119) *Muḡtaḍab* II, 155; *Mā yanṣarif*, 59, 161; 'Uṣūl I, 408; *Ġūmal*, 72.

120) *Ma'ānī* I, 27; II, 84.

121) *Maḡālis*, 597.

122) *Ma'ānī* I, 12.

123) Talmon 1986, 153; Owens 1990, 158.

124) 'Uṣūl I, 152-3.

125) cf. *Kitāb* I, 218.

126) *Maḡālis*, 43.



る中で用いられている<sup>127)</sup>。しかしながら、アル・ファッラーが *Ma'ānī al-Qur'ān* でこの用語を使っているのを確認することはできない<sup>128)</sup>。

### 5. 1. 9. 動詞の時制

クーファ学派は動詞の時制を *māḍī* (過去)、*mustaqbal* (未来)、*fi'l dā'im* (現在) の3つに分類し、それぞれ、完了形、未完了形、能動分詞に対応させているが、特に、*fi'l dā'im* の位置づけはバスラ学派とは異なっている<sup>129)</sup>。例えば、アル・ファッラーの *Ma'ānī al-Qur'ān* では、「*mā la-ka* については未来形 (*mustaqbal*) が用いられ、現在形 (*dā'im*) や過去形 (*māḍī*) は用いられない。」のような表現がみられる<sup>130)</sup>。

サアラブの *Mağālis* でもアル・ファッラーと同じ3つの分類及び用語が確認できる<sup>131)</sup>。

### 5. 2. *Mağālis* にみる「文法論争」の記述

12世紀のイブン・アル・アンバーリーが *'Inṣāf* において記述している121の学派間論争のすべてについて、9世紀以前の文献で裏付けを取ることは不可能である。しかしながら、これらの中には、アル・ファッラーやサアラブが、見解の相違として記している文法的争点も無視できない数が存在している。以下では、*'Inṣāf* で扱われている学派間論争のうち、クーファ学派の見解であると言われているものが、アル・ファッラーの *Ma'ānī al-Qur'ān* で確認できるものを選び、サアラブの *Mağālis* での記述との対比を試みる。これによって、アル・ファッラーの見解がいかにサアラブに受け継がれたのかをまとめる。

#### 5. 2. 1. *ni'ma* と *bi'sa* の品詞について

イブン・アル・アンバーリーによれば、クーファ学派は *ni'ma* と *bi'sa* の2語を名詞とみなし、バスラ学派は動詞とみなしている。さらに、クーファ学派でも意見が割れており、アル・キサーイーは、バスラ学派と同じ見解であると記述している<sup>132)</sup>。

アッ・ザッジャージーが伝える二次的な情報によると、サアラブがアッ・リヤーシーとの議論の中で、アル・ファッラーは *ni'ma* を名詞とみなすが、アル・キサーイーは動詞とみなしている旨の発言をしたという<sup>133)</sup>。

127) *Mağālis*, 439.

128) Versteegh, 1993, 27.

129) al-Mahzūmī 1958, 237-41; Owens 1988, 136; Versteegh 1981, 53-5; 1993, 153; 1995, 146. Talmon 1990, 271; 2003, 211-2.

130) *Ma'ānī* I, 165. cf. *Ibid.* I, 109, 142; II, 221, 403; *Kitāb* I, 102.

131) *Mağālis*, 231.

132) *'Inṣāf*, 97ff.

133) *Mağālis al-'Ulamā'*, 48. ヤークートは、アリー・イブン・スライマーン・アル・アフファシュ (*'Alī ibn Sulaymān al-'Aḥfaṣ* (= 小アフファシュ)) がアッ・ザッジャージーに語ったとされるサアラブの言葉を伝えている。ここでも、アル・ファッラーのみが *ni'ma* を名詞であると考えている。' *Trṣād* II, 70.

アル・ファッターは「この2語は動詞ではない *lays-atā bi-l-fi-l-i*<sup>134)</sup>」と表現していることから、少なくとも、バスラ学派の文法家やアル・キサーイーとは異なる見解を持っていたのは明らかである。ただし、「名詞」であると明言する部分は *Ma'ānī* では確認することはできない<sup>135)</sup>。

サアラブには、クルアーンの一節「*bi'sa mā qaddam-at la-hum 'anfus-u-hum* ((彼らは)なんと悪いことを、みずからすすんでするものよ (5:80))」に関して、この文の主語をめぐるアル・キサーイーとアル・ファッターの見解の相違を記しているが、*bi'sa*の品詞については明言していない<sup>136)</sup>。

## 5. 2. 2. 否定辞 *mā* と名詞文補語の対格

ヒジャーズ方言において、否定辞 *mā* がある場合、名詞文の補語が対格をとるのは、補語の前にあった前置詞 *bi-* が省略されたことが原因であると考えられるクーファ学派に対し、対格をとるのは *mā* そのものに起因すると考えるバスラ学派の対立がある<sup>137)</sup>。

バスラ学派の主張としては、名詞文を否定する際に一般的に用いられる動詞 *lays-a* (～ない) によって補語が対格をとるため、その類推から否定辞 *mā* による対格を説明しようというものである<sup>138)</sup>。

アル・ファッターは、タミーム部族方言と対比しつつ、前置詞が省略されたという説に基づく説明を試みている<sup>139)</sup>。サアラブも、*lays-a* の類推から否定辞 *mā* を説明するバスラ学派に対し反論している<sup>140)</sup> ことから、サアラブはアル・ファッターの見解を支持しているものと考えられる。

## 5. 2. 3. 'inna に後続する文の主語が主格をとる条件について

イブン・アル・アンバーリーは、'inna に後続する文の主語が主格をとる場合の条件について、クーファとバスラでは見解が異なることを指摘している<sup>141)</sup>。

一般的に、'inna に後続する文の主語は対格をとるが、例(1)では、一つ目の主語 *zayd-an* が対格、二つ目の主語 *'amr-un* が主格である。例(2)では、一つ目の主語は人称代名詞・接尾形 *-ka* となり、二つ目の主語 *bakr-un* が主格となっている。

(1) 'inna *zayd-an wa-'amr-un qā'im-āni*. (ザイドとアムルは立っている)

(2) 'inna-*ka wa-bakr-un munṭaliq-āni*. (あなた [男] とバクルは出発する)

134) *Ma'ānī* II, 141. cf. *Ibid.* I, 267-8.

135) 「動詞ではない」との表現が、必ずしも「名詞」と考えていたとの解釈にはつながらないとの立場もある。  
Baalbaki 1981, 16.

136) *Mağālis*, 62. cf. *Inbah* II, 372.

137) *'Inṣāf*, 165 ff.; Baalbaki 1981, 17.

138) *Kitāb* I, 21-2, 62; *Muqtaḍab* IV, 188-90.

139) *Ma'ānī* II, 42.

140) *Mağālis*, 354, 596-7.

141) *'Inṣāf*, 185 ff.; cf. Baalbaki 1981, 18; *Kitāb* I, 249-50; *'Uṣūl* I, 253.

クーファ学派でも見解が分かれており、アル・キサーイーは、いかなる場合も許容されるとの見解を示すのに対し、アル・ファッラーは、'inna の作用が現れない場合<sup>142)</sup> 以外は許容されないとする。一方のバスラ学派は、いかなる場合も許容されないと立場をとる。

クルアーンにも、例 (3) の aṣ-ṣābi'-ūna のように主格をとり、対格にならない例があることが、クーファ学派の根拠の一つになっている。

- (3) 'inna l-laḏīna 'āman-ū wa-l-laḏīna hād-ū wa-ṣ-ṣābi'-ūna wa-n-naṣārā (5:69) (信者であれ、ユダヤ教徒であれ、サービア人であれ、キリスト教徒であれ、)

アル・ファッラーは、上記のとおり、自らとアル・キサーイーとの見解の相違を記述している<sup>143)</sup>。サアラブも、アル・ファッラーの言葉として、「私は格変化が起こらない場合以外は、そのようには言わない。アル・キサーイーは、格変化が起こる場合でも、起こらない場合でもそのように言う<sup>144)</sup>。」と記しており、二人の見解に相違があることを伝えている。もっとも、サアラブ自身の立場は明らかにされていない。

#### 5. 2. 4. 数詞「11-19」と定冠詞について

イブン・アル・アンバーリーは、数詞11から19の用法について、クーファ学派が例 (4) (5) の数詞の用法を認めていると記述している<sup>145)</sup>。ともに、「15ディルハム」の意味で、語の組み合わせとしては「5」「10」「ディルハム (銀貨; 通貨単位)」となっているが、二語目以降に定冠詞 al-, ad- が付くかどうか議論になっている。

- (4) al-ḥamsat-a al-'aṣar-a dirham-an (15ディルハム)

- (5) al-ḥamsat-a al-'aṣar-a ad-dirham-a

これに対して、バスラ学派は、al-'aṣar-a や ad-dirham-a のように定冠詞を付けることは認めず、例 (6) の構文のみを認める。

- (6) al-ḥamsat-a 'aṣar-a dirham-an

アル・ファッラーは、例 (4) (5) のように定冠詞が付くことを許容する<sup>146)</sup>。

サアラブは、上記のような定冠詞が付く語の制約に関して、バスラ側の見解を紹介しているが、クーファ側の見解は読み取ることはできない<sup>147)</sup>。

142) 'innaがあることによって名詞が格変化し対格になる場合を意味する。

143) *Ma'anī* I, 310-1.

144) *Maḡālis*, 262.

145) *'Inṣāf*, 312 ff.; cf. *Kitāb* I, 86; II, 47; *Muqtaḍab* II, 175-76; *'Uṣūl* II, 14; *Šarḥ al-Mufaṣṣal* VI, 33; *Šarḥ al-'Uṣmānī* I, 175. この問題については、イブン・アッ・スイッキートも、アル・キサーイーとバスラ学派との見解の相違として記述している。*'Islāḥ*, 302. なお、バアルバックキーは、この記述が「バスラの文法家」が集団として明確な文法的観点からの言及として確認できる最も古いものであると主張する。*Baalbaki* 1981, 6-7.

146) *Ma'anī* II, 33.

147) *Maḡālis*, 590.

## 5. 2. 5. イダーファの分断

イブン・アル・アンバーリーによると、クーファ学派は、イダーファの第一語と第二語との間に、副詞句、前置詞句やそれ以外のものが置かれ、イダーファが分断されることが、詩の形式的必然性 (*darūrat aš-ši'r*) から許されると主張する。一方のバスラ学派は、副詞句と前置詞句以外は許されないと主張する<sup>148)</sup>。

例(7)の *al-qalūš-a* (雌ラクダ) は動名詞 *zağğ-a* (突き刺すこと) の目的語であり、本来の位置はイダーファの第二語 *'abī mazādah* の後であるが、詩の形式上の制約によって語順が変わり、イダーファの構造を分離する結果となっている。

(7) *fa-zağğag-tu-hā bi-mizağğat-in zağğ-a al-qalūš-a 'abī mazādah* (アブー・マザーダが自分の雌ラクダを突き刺したのと同じ方法で、私は彼女を刺した。)

アル・ファッターは、例(7)のような語順は、ヒジャーズの文法家 (*naḥwiyy-ū 'ahl al-ḥiğāz*) やマディーナの文法家 (*naḥwiyy-ū 'ahl al-madīna*) によるものであり、アラビア語にはない表現であるとして否定している。その上で、*zağğ-a al-qalūš-i 'abī mazādah* という語順のみを許容して、副詞句や前置詞句に限りイダーファの分断を認めるとの立場をとる<sup>149)</sup>。

サアラブは、*zarf* による分断を認めるだけでなく、目的語による分断をも認めている<sup>150)</sup>。

5. 2. 6. 余剰な接続詞 *wa-* について

接続詞 *wa-* が余剰 (*zā'idā*) として置かれることをクーファ学派は許容し、バスラ学派からもアル・アフファシュ、アル・ムバッラド、イブン・バルハーンらがこれに同調するのに対し、他のバスラ学派の文法家は許容しないという問題がある<sup>151)</sup>。

例(9)のクルアーンの章句に関して、*wa-'adīn-at* の *wa-* を読まないという、カタール (*Qatāda* [d. 735]) の解釈どおりに読むことに関し、アル・ファッターは不満を述べている<sup>152)</sup>。

(9) *'idā as-samā'u inšaqq-at wa-'adīn-at li-rabb-i-hā wa-ḥuqq-at* (84:1-2) (天が割れて、主のみことばを聞いて服する時)

クルアーンの他の章句にも、*wa-* の有無について問題となる箇所がある。

(10) *ḥattā 'idā ḡā'-ū-hā futiḥ-at 'abwāb-u-hā* (39:71) (彼らはそこに着くと、門が開かれた)

148) *'Inṣāf*, 427 ff.; cf. *Kiṭāb* I, 74, 76, 303; *'Uṣūl* II, 226-7; III, 467; *Ḥizāna* IV, 415. バスラ学派の中でも見解は分かれ、アル・ムバッラドは、詩においてイダーファの分断が可能であるとの見解を拒否することを表明している。 *Muqtaḍab* IV, 288-9. これに対し、イブン・ジンニーは、イダーファの分断をすべて許容している。 *Ḥaṣā'iṣ* II, 406-7. この論争について、イブン・アル・アンバーリーが、スィーバワイヒヤ後のバスラ学派の文法家を無視し、アル・ムバッラドの見解のみを想定したことにより、不正確にバスラ学派の見解を構築してしまったのではないかとバアルパッキーは考えている。 Baalbaki 1981, 21. cf. Bernards 1997, 71-2.

149) *Ma'ānī* I, 357-58; II, 81-2.

150) *Mağālis*, 125-6. サアラブは「分断する」を意味する一般的な用語 *faṣal-a* の代わりに *i'taraḍ-a* を用いる。

151) *'Inṣāf*, 456 ff.; Baalbaki 1981, 6, 9-10. cf. *Kiṭāb* I, 403; *Muqtaḍab* II, 79-81; *Ḥaṣā'iṣ* II, 462.

152) *Ma'ānī* I, 238. cf. *Ibid.* I, 107-8, 238; II, 50, 211, 390; III, 249.

(11) ḥattā 'idā ḡā'-ū-hā wa-futiḥ-at 'abwāb-u-hā (39:73)

この二つの章句の違いは wa- の有無であるが、違いはないというのがクーファ学派の主張であるとされている<sup>153)</sup>。

サアラブはアル・ファッラーの名を出してはいないが、wa- が挿入される例をあげている<sup>154)</sup>。

### 5. 2. 7. 「前置詞＋人称代名詞・接尾形＋名詞」の場合の名詞の格変化について

以下 (12) の文において、前置詞 bi- に人称代名詞 -ka が接尾し、さらに前置詞の目的語として名詞が後続する場合、前置詞 bi- を繰り返すことなく、名詞属格 zayd-in を置くことが可能かという問題について意見が分かれる。クーファ学派は、この構文を許容するのに対し、バスラ学派は許容しないとされている<sup>155)</sup>。

(12) marar-tu bi-ka wa-zayd-in. (私はあなたとザイドの側を通り過ぎた)

クーファ学派の根拠の一つには、例 (13) のクルアーンの名詞対格 'arḥām-a を七読誦者の一人ハムザ・アツ・ザイヤートが 'arḥām-i と属格での読誦を主張したことがある。

(13) wa-ttaqū l-lāh-a l-laḏī tasā'al-ūna bi-hi wa-l-'arḥām-a (4:1) (その御名によっておまえたちが互いに尋ね合う神を畏れかしこめ。そして、たちねの胎をも。)

アル・ファッラーは、'arḥām-i のように属格をとることは好ましくないとしながらも、詩においては許容されるとの立場をとっている<sup>156)</sup>。

サアラブには、「アル・キサーイーは、名詞を人称代名詞と同列に結合することは許さない。また、人称代名詞の後の強調 (tawkīd) としても許さない<sup>157)</sup>。」という記述がある。これは、アル・キサーイーがこの構文を容認していないことを述べたものであると考えられる。

### 5. 2. 8. 人称代名詞が主語となる動詞に後続する別の主語

次の文 (14) において、qum-tu のように、動詞の人称変化語尾 -tu (私は) によって主語が示されている場合、動詞を繰り返すことなく、もう一つの主語 zayd-un (ザイドは) を名詞主格として後続させることが可能か否かの問題がある<sup>158)</sup>。

(14) qum-tu wa-zayd-un (私とザイドは立ち上がった)

多くの場合、(15) のように二つ目の主語に呼応する動詞を繰り返すか、(16) のように、人称代名詞・独立形 'ana (私は) が置かれる。

(15) qum-tu wa-qām-a zayd-un

(16) qum-tu 'ana wa-zayd-un

153) 'Inṣāf, 457.

154) Maḡālis, 59.

155) 'Inṣāf, 463 ff.; Baalbaki 1981, 9. Kāmil, 451.

156) Ma'ānī I, 252-3.

157) Maḡālis, 324.

158) 'Inṣāf, 474 ff.; Baalbaki 1981, 22.

この問題について、クーファ学派は(14)を許容するのに対し、バスラ学派は詩において形式的な必然性がある場合に限り認める<sup>159)</sup>というように、両学派で見解が分かれている。

アル・ファッターはクルアーンに次の(17)のような章句があることを指摘している<sup>160)</sup>ことから、この構文を許容していると解釈できる。この例では、動詞 *kun-nā* の人称変化語尾 *-nā* (われわれは) が一つ目の主語で、二つ目の主語 *'abā'-u-nā* (われわれの先祖は) が主格で置かれている。

(17) *'a-'idā kun-nā turāb-an wa-'abā'-u-nā* (27:67) (われわれとわれわれの先祖が塵土になったあと)

サアラブは、アル・ファッターや自身の見解について、明確に述べてはいないが、前述の5.2.7でふれた「アル・キサーイーは、名詞を人称代名詞と同列に結合することは許さない。また、人称代名詞の後の強調としても許さない。」との表現は、この問題に関しても当てはまると考えられる。

### 5. 2. 9. 'aw が wa 又は bal の意味で用いられるか否か

'aw (または) が wa (～と～; さらに) 又は bal (それどころか) の意味で用いられる場合があることを、以下(18)のクルアーンの章句を例にあげて主張するクーファ学派に対し、バスラ学派はそのような意味で用いられないと主張する<sup>161)</sup>。

(18) *wa-'arsal-nā-hu 'ilā mi'at-i 'alf-in 'aw ya-zīd-ūna* (37:147) (われらは彼を、十万人またはそれ以上の民のもとへ遣わした。)

確かに、アル・ファッターは、この章句に関して 'aw が bal の意味を持つ (*fī ma'nā*) と記述している<sup>162)</sup>。また、アル・ムバッラドは、文法家のうちの一団 (*qawm*) が、'aw が bal と同等の地位にある (*bi-manzilāt*) としていると記述しているが<sup>163)</sup>、アル・ファッターを名指しているわけではなく、誰を指すのかは不明である<sup>164)</sup>。

サアラブは、bal の意味を持つというアル・ファッターの見解と、wa の意味を持つというアル・ファッター以外の文法家の見解を併記しているが、自身の見解は示していない<sup>165)</sup>。

### 5. 2. 10. 'an が省略された場合、その作用は有効か否か

'an (～すること) に後続する動詞未完了形は接続法をとるが、'an が省略されても、その作用によって動詞は接続法となることを許容するクーファ学派に対し、バスラ学派は、'an の作

159) *Kitāb I*, 118, 126, 343; *Kāmil*, 182; *'Uṣūl II*, 338.

160) *Ma'ānī I*, 304; III, 95.

161) *'Inṣāf*, 478 ff.; Baalbaki 1981, 13.

162) *Ma'ānī II*, 393.

163) *Muqtaḍab III*, 304.

164) アル・ファッターは「*fī ma'nā* (同じ意味で用いられる)」と「*bi-manzilāt* (文法的に同等であり、入れ替えが自由である)」の二つの表現を使い分けている。*Ma'ānī II*, 362.; cf. Kinberg 1996, 502, 787.

165) *Maḡālis*, 112.

用は生じないと主張する<sup>166)</sup>。クーファ学派の根拠の一つは、アブドゥウッラー・イブン・マスウードの読誦法にある。

例 (19) の *lā ta-‘bud-ūna* は未完了形・直接法であるが、イブン・マスウードは、*‘an lā ta-‘bud-ū* の *‘an* が省略されたときとみなすことにより *lā ta-‘bud-ū* という接続法の読みを許容する。

(19) *wa-‘id ‘aḥad-nā mīṭāq-a banī ‘isrā‘il-a lā ta-‘bud-ūna ‘illā l-lāh-a* (2:83) (また、われらがイスラエルの子らと契約を結んだときのこと。神のほかには崇めてはならぬ。)

また、例 (20) タラファのムアッラカ<sup>167)</sup> において、*‘a-ḥḍur-a* と接続法で読まれるのは、直前にあった *‘an* が省略されたためであると説明する。

(20) *‘alā ‘ayy-u-hādā z-zāḡirī ‘a-ḥḍur-a l-waḡā wa-‘an ‘a-šhad-a l-laddāt-i hal ‘anta muḥlid-i.* (さて、私が戦争に加わったとか、享樂にわが身をやつしたと言って私を誹る者よ、貴殿は永遠の命を私に授けてくれるのか<sup>168)</sup>。)

アル・ファッターも、上記 (20) の *‘a-ḥḍur-a* が接続法で読まれる理由を *‘an* の省略であると主張する<sup>169)</sup>。サアラブは、アル・ファッターの見解には言及していないものの、このように *‘an* を省略する用法が例外的 (*šādd*) であるとしながらも許容している<sup>170)</sup>。

## 5. 2. 11. sa- の語源は sawfa か否か

動詞未完了形・直接法とともに用いられ、未来を示す接頭辞 *sa-* の語源が、*sawfa* であるとするクーファ学派に対し、バスラ学派は二つの語の間に語源的な関連性はないと考える<sup>171)</sup>。イブン・アル・アンバーリーが記しているクーファ学派の論拠の一つに、“純粋なアラブ”の言葉には *sawfa* の異形として *safa* や *saw* が観察される点がある。

アル・ファッターは、「よく使われる語は、しばしば音が脱落する」として、「*sawfa* と *sa-* は同じ意味であり (*al-ma‘nā wāḥid-un*)、*sawfa* の *w* と *fa* が脱落した」と説明する<sup>172)</sup>。

サアラブは *saf*<sup>173)</sup>、*saw* という二つの異形について記しているが、*sa-* が *sawfa* の語源にまでは踏み込んでいない<sup>174)</sup>。

166) *‘Inṣāf*, 559 ff.; Baalbaki 1981, 10. cf. *Kitāb* I, 155; *Muqtaḍab* II, 84-5, 136; *Ma‘ānī* I, 53-4; III, 265; *‘Uṣūl* II, 176; *Ḥizāna* I, 119-20.

167) 他の文献には、*az-zāḡirī* を *al-lā‘imī* としているものもある。Ibn an-Naḥḥās, *Šarḥ al-Qaṣā‘id*, 80; cf. *al-‘Anbārī*, *Šarḥ al-Qaṣā‘id*, 193.

168) 翻訳は池田 2004, 14 による。

169) *Ma‘ānī* III, 265.

170) *Maḡālis*, 317.

171) *‘Inṣāf*, 646 ff. バスラ学派は *sa-* と *sawfa* とは無関係であると主張すると言われているものの、バアルバッキーによれば、初期のバスラ学派の資料でこれを裏付けることはできないという。Baalbaki 1981, 23.

172) *Ma‘ānī* III, 274.

173) *‘Inṣāf*, 646 の母音符号は *safa*、*Maḡālis*, 315 は *saf* と付してある。

174) *Maḡālis*, 315.

## 6. おわりに

9世紀のアラブ語学をとりまく状況に関する記述は、その時代の文献が極めて限られているという制約のもと、多くの情報をアッ・ザッジャージーなど10世紀以降の「バスラ学派」の文法家による文献に依存してきた。そのため、しばしば「バスラ」と「クーファ」という二項対立が殊更に強調されたり、文法家どうしの論争や対立が、時には様々な脚色に加わって後世に伝えられてきたのも事実である。

とは言え、バスラとクーファの間に方法論的な違いや対立はなく、すべてが後世の作り話であると結論づけることは難しい。一つには、アル・ムバッラドが使っていたことが確認できない用語を、クーファ側のアル・ファッラーとサアラブがとともに使用する例が多くみられることがあげられる。つまり、文法用語が定まっていなかった時代であるとはいえ、一部の用語に学派ごとに好んで使われる傾向が強いものがあるということは、当時のバグダードの文法家たちが、ある程度、仲間内で分かれて研究教育活動を行っていたことを裏付けるものではないだろうか。二つ目に、個別の文法問題に対する見解に関して、意見の相違がすでに存在していたことが確認できることがある。つまり、後の12世紀にイブン・アル・アンバーリーが整理し、リストアップした「両学派間の意見の相違」のうち、実際に9世紀のアル・ファッラーとサアラブの両方の著作で確認できるものが少なくないという事実は重視せねばならない。9世紀以前にすでに「学派間論争」の素材があったからこそ、10世紀以降に事実上「学派」が実態を持たなくなっても、アラブ伝統文法の主要なテーマとして生き続けたのではないだろうか。

一方で、10世紀以降の文法家列伝の多くが描く学派間や個人間の対立には、誇張や画一化がみられ、当時のバグダードの文法研究の実情とは乖離していることを指摘すべきである。サアラブの *Mağālis* に限らず、9世紀から10世紀にかけての文法書及びそれに類する書に一貫して見られる基本的姿勢は、文法事象に対する極めて冷静な態度であると言える。自らの師や仲間の文法家を擁護する姿勢以上に、様々な見解の列举と、それに対しての検証が多くの部分を占めており、敵対する個人や相手側の「学派」への感情的な非難などが見られない。つまり、「バスラ」と「クーファ」の勢力に分かれて、激しい議論を戦わせたという状況を、これらの文献では読みとれないのである。このような研究態度があったからこそ、クーファ学派の中でも、アル・キサーイーとアル・ファッラーの見解が分かれ、一方がバスラ学派と同じ見解を持つということが多くみられるのではないか。

サアラブは、アル・ファッラーの死後に生まれたため、直接の教えを受けたわけではない。二人はいわば、文献のみを通して関係づけられた師であり弟子であった。*Ma‘ānī al-Qur‘ān* を暗記していたと伝えられるサアラブが、アル・ファッラーの用語や方法論、さらには個別の文法問題に対する見解に精通し、それらの要素を自らの著作に取り入れた時、それがアル・ムバッラドや他のバスラ学派の文法家の著作にみられないものであれば、二人は、バスラとは別の「流儀、流派」を形成していると言うことは可能であろう。



## 参考文献

[一次資料]

- 'Abū at-Ṭayyib, *Marātib* = 'Abū at-Ṭayyib 'Abd ar-Raḥmān ibn 'Alī. *Marātib an-Naḥwiyyīn*. Ed. by Muḥammad 'Abū al-Faḍl 'Ibrāhīm. Cairo: Dār al-Fikr al-'Arabī, 1974.
- al-'Anbārī, *Šarḥ al-Qaṣā'id* = 'Abū Bakr Muḥammad ibn al-Qāsim. *Šarḥ al-Qaṣā'id as-Sab' at-Ṭiwāl al-Ġāhiliyyāt*. Ed. by 'Abd as-Salām Muḥammad Hārūn. Cairo: Dār al-Ma'ārif, 2005.
- al-Baġdādī, *Hiżāna* = 'Abd al-Qādir b. 'Umar al-Baġdādī. *Hiżānat al-'Adab*. Ed. by 'Abd as-Salām Muḥammad Hārūn. 8 vols. Cairo: al-Hay'a al-Miṣriyya al-'Āmma li al-Kitāb, 1979.
- al-Farrā', *Ma'ānī* = 'Abū Zakariyyā 'Yaḥyā ibn Ziyād. *Ma'ānī al-Qur'ān*. Ed. by Muḥammad 'Alī an-Nağğār. 3 vols. Cairo: Dār as-Surūr, n.d.
- al-Ḥaṭīb, *Ta'rīḥ Baġdād* = 'Abū Bakr 'Aḥmad b. 'Alī al-Ḥaṭīb al-Baġdādī. *Ta'rīḥ Baġdād*. 14 vols. Beirut: Dār al-Kutub al-'Ilmiyya, n.d.
- Ibn al-'Anbārī, *Inṣāf* = 'Abū al-Barakāt 'Abd ar-Raḥmān ibn Muḥammad. *al-'Inṣāf fī Masā'il al-Ḥilāf bayna an-Naḥwiyyīn al-Baṣriyyīn wa al-Kūfiyyīn*. Ed. by Muḥammad Muḥyī ad-Dīn 'Abd al-Ḥamīd. 2 vols. Beirut: Dār al-Fikr, 1982.
- Ibn al-'Anbārī, *Nuḥḥa* = 'Abū al-Barakāt 'Abd ar-Raḥmān ibn Muḥammad. *Nuḥḥat al-'Alibbā' fī Ṭabaqāt al-'Uḍabā'*. Ed. by Muḥammad 'Abū al-Faḍl 'Ibrāhīm. Cairo: Dār al-Fikr al-'Arabī, 1998.
- Ibn Ġinnī, *Ḥaṣā'is* = 'Abū al-Faḥḥ 'Uṭmān. *al-Ḥaṣā'is*. Ed. by Muḥammad 'Alī an-Nağğār. 3 vols. Cairo, 1952-56. (Repr., Beirut: Dār al-Kitāb al-'Arabī, n.d.)
- Ibn Ġinnī, *Luma'* = 'Abū al-Faḥḥ 'Uṭmān. *Kitāb al-Luma' fī an-Naḥw*. Edité et annoté par Hadī M. Kechrida. Stockholm: Almqvist & Wiksell, 1976.
- Ibn Hišām, *Muġnī* = Ġamāl ad-Dīn 'Abū Muḥammad 'Abdullāh ibn Yūsuf. *Muġnī al-Labīb 'an Kutub al-'A'ārib*. Ed. by Muḥammad Muḥyī ad-Dīn 'Abd al-Ḥamīd. Beirut: al-Maktaba al-'Aṣriyya, 1987.
- Ibn Hišām, *Šuḍūr* = Ġamāl ad-Dīn 'Abū Muḥammad 'Abdullāh ibn Yūsuf. *Šuḍūr ad-Dahab*. Ed. by Muḥammad 'Abd al-Mun'im Ḥafāğī & 'Abd al-'Azīz Šaraf. Beirut: Dār al-Kitāb al-Lubnānī, 1999.
- Ibn Ḥallikān, *Wafayāt* = Šams ad-Dīn 'Aḥmad ibn Muḥammad. *Wafayāt al-'A'yān wa 'Anbā' 'Abnā' az-Zamān*. Ed. by 'Iḥsān 'Abbās. 7 vols. Beirut: Dār at-Taqāfa, n.d.
- Ibn an-Nadīm, *Fihrist* = 'Abū al-Farağ Muḥammad ibn 'Abī Ya'qūb 'Ishāq al-Warrāq. *Kitāb al-Fihrist*. Ed. by Riḍā Tağaddud ibn 'Alī ibn Zayn al-'Ābidīn al-Ḥā'irī al-Mazdarānī. Beirut: Dār al-Ma'rifa, 1978.
- Ibn an-Naḥḥās, *Šarḥ al-Qaṣā'id* = 'Abū Ġa'far 'Aḥmad ibn Muḥammad ibn 'Ismā'īl ibn Yūnis al-Marādī. *Šarḥ al-Qaṣā'id al-Mašhūrāt*. Beirut: Dār al-Kutub al-'Ilmiyya, n.d.
- Ibn as-Sarrāğ, *Uṣūl* = 'Abū Bakr ibn as-Sarī. *al-'Uṣūl fī an-Naḥw*. Ed. by 'Abd al-Ḥusayn al-Fatī. Beirut: Mu'assasat ar-Risāla, 1985.
- Ibn as-Sikkīt, *Alfāz* = Ya'qūb ibn 'Ishāq. *Kitāb al-'Alfāz*. Ed. by Faḥr ad-Dīn Qabāwa. Beirut: Maktabat Lubnān, 1998.
- Ibn as-Sikkīt, *Islāḥ* = Ya'qūb ibn 'Ishāq. *Islāḥ al-Mantiq*. Ed. by 'Aḥmad Muḥammad Šakir & 'Abd as-Salām Muḥammad Hārūn. Cairo: Dār al-Ma'ārif, 1987.
- Ibn Ya'īs, *Šarḥ al-Mufaṣṣal* = Muwaffaq ad-Dīn. *Šarḥ al-Mufaṣṣal*. 10 vols. Beirut: 'Ālam al-Kutub, n.d.
- al-Mubarrad, *Kāmil* = 'Abū al-'Abbās Muḥammad ibn Yazīd. *al-Kāmil fī al-Luġa wa al-'Adab*. Ed. by 'Abd al-Ḥamīd 'Aḥmad Yūsuf Hindāwī. 2 vols. Beirut: Dār al-Kutub al-'Ilmiyya, 1996.
- al-Mubarrad, *Muqtaḍab* = 'Abū al-'Abbās Muḥammad ibn Yazīd. *al-Muqtaḍab*. Ed. by Muḥammad 'Abd al-Ḥālīq

- 'Uḡayma. 4 vols. Beirut, 'Ālam al-Kutub, n.d.
- al-Qiftī, 'Inbāh = Ġamāl ad-Dīn 'Abū al-Ḥasan 'Alī ibn Yūsuf. 'Inbāh ar-Ruwāt 'alā 'Anbāh an-Nuḥāt. Ed. by Muḥammad 'Abū al-Faḍl 'Ibrāhīm. 4 vols. Cairo: Dār al-Fikr al-'Arabī, 1986.
- Sībawayhi, *Kitāb* = 'Abū Biṣr 'Amr ibn 'Utmān. *al-Kitāb*. (*Le livre de Sībawayhi*) éd. par Hartwig Derenbourg. 2 vols. Paris, 1881-1889 [réimpr. Hildesheim, 1970]
- as-Sīrāfī, 'Aḥbār = 'Abū Sa'īd al-Ḥasan ibn 'Abdullāh. 'Aḥbār an-Naḥwiyyīn al-Baṣriyyīn. Ed. by Fritz Krenkow. Paris: Paul Geuthner and Beirut: Imprimerie Catholique, 1936.
- as-Suyūfī, *Buḡya* = Ġalāl ad-Dīn 'Abū al-Faḍl 'Abd ar-Raḥmān ibn 'Abī Bakr. *Buḡya al-Wu'āt fī Ṭabaqāt al-Luḡawiyyīn wa an-Nuḥāt*. Ed. by Muḥammad 'Abū al-Faḍl 'Ibrāhīm. 2 vols. Beirut: al-Maktaba al-'Aṣriyya, n.d.
- as-Suyūfī, *Ham* = Ġalāl ad-Dīn 'Abū al-Faḍl 'Abd ar-Raḥmān ibn 'Abī Bakr. *Ham' al-Hawāmi' fī Ṣarḥ Ġam' al-Ġawāmi'*. Ed. by 'Aḥmad Ṣams ad-Dīn. 4 vols. Beirut: Dār al-Kutub al-'Ilmiyya, 1988.
- as-Suyūfī, 'Iqtirāḥ = Ġalāl ad-Dīn 'Abū al-Faḍl 'Abd ar-Raḥmān ibn 'Abī Bakr. *al-'Iqtirāḥ fī 'Ilm 'Uṣūl an-Naḥw*. Ed. by Muḥammad Ḥasan Muḥammad Ḥasan 'Ismā'īl as-Šāfi'ī. Beirut: Dār al-Kutub al-'Ilmiyya, 1998.
- Ṭa'lab, *Maḡālis* = 'Abū al-'Abbās 'Aḥmad ibn Yaḥyā. *Maḡālis Ṭa'lab*. Ed. by 'Abd as-Salām Muḥammad Hārūn. 2 vols. Cairo: Dār al-Ma'ārif, n.d.
- 'Uṣmūnī, *Ṣarḥ al-'Uṣmūnī* = 'Abū al-Ḥasan Nūr ad-Dīn 'Alī ibn Muḥammad ibn 'Isā. *Ṣarḥ al-'Uṣmūnī 'alā 'Alfiyyat Ibn Mālik*. Ed. by Ḥasan Ḥamad. 4 vols. Beirut: Dār al-Kutub al-'Ilmiyya, 1998.
- Yāqūt, 'Iršād = Šihāb ad-Dīn 'Abū 'Abdullāh Yāqūt ibn 'Abdullāh ar-Rūmī al-Ḥamawī al-Baḡdādī. 'Iršād al-'Arṭb'īlā Ma'rifaṭ al-'Adṭb. 5 Vols. Beirut: Dār al-Kutub al-'Ilmiyya, 1991.
- az-Zaḡḡāḡ, *Mā yanṣarif* = 'Abū 'Ishāq 'Ibrāhīm ibn as-Sarī. *Mā yanṣarif wa mā lā yanṣarif*. Ed. by Hudā Maḥmūd Qarā'a. Cairo: Maktabat al-Ḥānḡī, 2000.
- az-Zaḡḡāḡ, *Ġumal* = 'Abū al-Qāsim 'Abd ar-Raḥmān ibn 'Ishāq. *al-Ġumal*. Éd. par Mohammed Ben Cheneb. Paris: Klincksieck, 1957.
- az-Zaḡḡāḡ, 'Iḍāḥ = 'Abū al-Qāsim 'Abd ar-Raḥmān ibn 'Ishāq. *al-'Iḍāḥ fī 'Ilal an-Naḥw*. Ed. by Māzin al-Mubārak. Cairo: Dār an-Nafā'is, 1996.
- az-Zaḡḡāḡ, *Maḡālis al-'Ulamā'* = 'Abū al-Qāsim 'Abd ar-Raḥmān ibn 'Ishāq. *Maḡālis al-'Ulamā'*. Ed. by 'Abd as-Salām Muḥammad Hārūn. Cairo: Maktabat al-Ḥānḡī, 1983.
- az-Zamaḡṣarī, *Mufaṣṣal* = 'Abū al-Qāsim Maḥmūd ibn 'Umar. *al-Mufaṣṣal fī 'Ilm al-'Arabiyya*. Beirut: Dār al-Ġīl, n.d.
- az-Zubaydī, *Ṭabaqāt* = 'Abū Bakr Muḥammad ibn al-Ḥasan. *Ṭabaqāt an-Naḥwiyyīn wa al-Luḡawiyyīn*. Ed. by Muḥammad 'Abū al-Faḍl 'Ibrāhīm. Cairo: Dār al-Ma'ārif, n.d.

## [二次資料]

- Baalbaki, R. 1981. "Arab grammatical Controversies and the extant Sources of the second and the third Centuries A. H." *Studia Arabica et Islamica. Festschrift for Ihsān 'Abbās on his Sixtieth Birthday*, ed. by Wadād al-Qādī, 1 - 26. Beirut: American University of Beirut.
- Bernards, M. 1997. *Changing Traditions. Al-Mubarrad's Refutation of Sībawayh and the Subsequent Reception of the Kitāb*. Leiden: E. J. Brill.
- Bernards, M. 2005. "Medieval Muslim Scholarship and Social Network Analysis: A Study of the Basra/Kufa Dichotomy in Arabic Grammar". in: Sebastian Günther ed. *Ideas, Images, and Methods of Portrayal. Insights into Classical Arabic Literature and Islam*. Leiden, Brill, pp. 129-40.
- Blau, J. 1963. "The Role of the Bedouins as Arbiters in linguistic Questions and the Mas'ala az-Zunburiyya". *Journal of Semitic Studies* 8, pp. 42-51.

- Bohas, G., J.-P. Guillaume, D.E. Kouloughli. 1990. *The Arabic Linguistic Tradition*. London and New York: Routledge.
- Bosworth, C.E. 1969. "The Tāhirids and Arabic Culture". *Journal of Semitic Studies* XIV, pp. 45-79.
- Carter, M.G. 1973. "Šarf et ḥilāf, Contribution à l'histoire de la grammaire arabe". *Arabica* XX, pp. 292 - 304.
- Carter, M.G. 1994. "Writing the History of the Arabic Grammar". *Historiographia linguistica* 21, pp. 387-416.
- Carter, M.G. 1999. "The Struggle for Authority: A re-examination of the Baṣran and Kūfan Debate". *Tradition and Innovation: Norm and Deviation in Arabic and Semitic Linguistics*, ed. by Lutz Edzard & Mohammed Nekroumi, Wiesbaden: Otto Harrassowitz, pp. 55 - 70.
- Carter, M.G. 2000. "The Development of Arabic Linguistics after Sībawayhi : Baṣra, Kūfa and Baghdad". in: Sylvain Auroux et al., eds., *History of the Language Sciences*. Berlin, pp. 263 - 72.
- Dayf, Š. 1968. *Al-Madāris an-Naḥwiyya*. Cairo: Dār al-Ma'ārif.
- Fleisch, H. 1957. "Esquisse d'un historique de la grammaire arabe". *Arabica*, IV pp.1-20.
- Fleisch, H. 1961. *Traité de philologie arabe*. I. *Préliminaires, phonétique, morphologie nominale*. Beirut: Imprimerie Catholique.
- Flügel, G. 1862. *Die grammatischen Schulen der Araber. Erste Abtheilung*. Die Schulen von Basra und Kufa und die gemischte Schule. Leipzig: F. A. Brockhaus.
- Fück, J. 1955. *'Arabīya. Recherches sur l'histoire de la langue et du style arabe*. Paris: Librairie Marcel Didier.
- Goldziher, I. 1877 (1994). *On the History of Grammar among the Arabs*. Transl. by Kinga Dévényi and Tamás Iványi. Amsterdam: Benjamins.
- Kinberg, N. 1996. *A Lexicon of al-Farra's Terminology in his Qur'an Commentary with Full Definitions, English Summaries and Extensive Citations*. Leiden, E.J.Brill.
- al-Maḥzūmī, M. 1958. *Madrasat al-Kūfa wa Manḥaḡu-hā fī Dirāsāt al-Luġa wa an-Naḥw*. 3rd edition. Beirut: Dār ar-Rā'id al-'Arabī.
- Nicholson, R.A. 1907. *A Literary History of the Arabs*. Reprint 1976, Cambridge University Press.
- Owens, J. 1988. *The Foundations of Grammar. An Introduction to Medieval Arabic Grammatical Theory*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins Publishing.
- Owens, J. 1990. *Early Arabic Grammatical Theory. Heterogeneity and Standardization*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins Publishing.
- as-Sāmarrā'i, I. 1987. *al-Madāris an-Naḥwiyya. 'Uṣṭūra wa Wāqī'*. 'Ammān: Dār al-Fikr.
- Šabra, M. H. 2001. *Tamarat al-Ḥilāf bayna an-Naḥwiyyīn al-Baṣriyyīn wa al-Kūfiyyīn*. Cairo: Dār Ġarīb.
- Sezgin, F. 1984. *Geschichte des arabischen Schrifttums*. Band IX, Grammatik. Leiden: E.J. Brill.
- Talmon, R. 1986. "al-Mas'ala az-Zunbūriyya. Dirāsa fī Māhiyyat 'Iḥtilāf al-Maḥabayn an-Naḥwiyyayn". *Al-Karmil* 7, pp. 131-63.
- Talmon, R. 1990. "The Philosophizing Farra': An Interpretation of an Obscure Saying Attributed to the Grammarian Ta'lab." Versteegh, K. & M.G. Carter ed. *Studies in the History of Arabic Grammar II*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins Publishing, pp. 265-79.
- Talmon, R. 2003. *Eighth-Century Iraqi Grammar: A Critical Exploration of Pre-Halḥilian Arabic Linguistics*. Winona Lake: Eisenbrauns.
- Troupeau, G. 1962. "La grammaire à Bagdād du IXe au XIIIe siècle". *Arabica. Volume spécial. Publié à l'occasion du mille deux centième anniversaire de la fondation de Bagdād*, pp. 397 - 405.
- Versteegh, C. H. M. 1977. *Greek Elements in Arabic Linguistic Thinking*. Leiden: E. J. Brill.
- Versteegh, C.H.M. 1989. "A Sociological View of the Arab Grammatical Tradition: Grammarians and their

- Professions". In: Paul Wexler, Alexander Borg and Sasson Somekh, *Studia linguistica et orientalia memoriae Haim Blanc dedicata*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz, pp. 289-302.
- Versteegh, C.H.M. 1993. *Arabic Grammar and Qur'ānic Exegesis in Early Islam*. Leiden: E.J. Brill.
- Versteegh, C. H. M. 1995. *The Explanation of Linguistic Causes. Az-Zağğāgī's Theory of Grammar*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins Publishing.
- Weil, G. 1913. *Die grammatischen Fragen der Basrer und Kufer*. Leiden : E. J. Brill.
- Yāsīn, M. H. 1980. *ad-Dirāsāt al-Luġawiyya 'inda al-'Arab 'ilā Nihāyat al-Qarn at-Tāliq*. Beirut: Dār Maktabat al-Hayāt.
- Yūsuf, M. I. 2000. *al-Ġuhād al-Luġawiyya li-Ibn as-Sarrāġ. Dirāsa Taḥlīliyya*. Cairo: Dār al-Kutub al-Miṣrī.
- 池田修 1970. 「9世紀以前のアラビア語研究」『オリエント』11巻3／4号 pp. 121 - 60.
- 池田修 1972. 「文法学派と都市」『イスラム化に関する共同研究報告5』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, pp. 173 - 209.
- 池田修 1982. 「バスラ学派とクーファ学派」杉勇・前嶋信次他編『オリエント史講座4 カリフの世界』学生社, pp. 124 - 140.
- 池田修 2004. 「アルムアッラカート試訳(II): タラファ」『関西アラブ・イスラム研究』4, pp.1-16.
- 岡崎英樹 2003. 「アラブ伝統文法における maf'ūl の下位範疇 – イブン・アッサッラージュの分類とそれ以降の変遷 –」『関西アラブ・イスラム研究』3, pp. 15 - 32.
- 岡崎英樹 2008. 「アラブ文法学における『学派』とマスダル maṣdar の位置づけ」『アラブ・イスラム研究』6, pp. 29 - 44.
- 岡崎英樹 2009. 「イブン・サッラージュ [al-'Uṣūl fī an-Naḥw] からみたアラブ文法論争」『アラブ・イスラム研究』7, pp. 31 - 46.
- 内記良一 1968. 「クーファ派文法学の格概念について」『東京外国語大学論集』17, pp. 65 - 82
- 藤本勝次・伴康哉・池田修訳 1979. 『コーラン』中央公論社.
- 堀内勝 1976. 「『コーラン』の口誦的性格について」日本サウディアラビア協会・日本クウェイト協会『アラビア研究論叢—民族と文化—』 pp. 115-49.